

ジノヴィエフ及びカメネフは、間もなく、彼自身がスターリンに向つて敵對的反對の地位にあることを發見した。彼等は、爭論を三幅對の間から中央委員會へ移さうと試みた時、スターリンがそこで確乎たる大多數を擁してゐることを發見したのだ。

カメネフはモスコウの公の指導者と見做されてゐた。しかし、一九二三年、即ち黨が大多數で反對派を支持して來た時に、カメネフがモスコウの黨組織へ參加して來たのを逐出して後は、モスコウのコンミスニストの一兵卒達は、冷靜に沈黙を維持した。スターリンに反抗する最初の企てとも、カメネフは宙に浮上つた自身を發見したのだ。レニングラード^{*}の^{*}状態はそれとは異つてゐた。レニングラードのコンミニュニストは、ジノヴィエフ配下の機關の重い眼險によつて、一九二三年の反對派から、防禦されてゐた。しかし今や、彼等の順番がやつて來た。レニングラードの労働者は、富農——いはゆるクラーク——に有利な政治的傾向及び一國限りの社會主義を指す政策によつて目を醒された。労働者の階級的抗議は、ジノヴィエフの高級官吏的^{*}反對と一致した。かくして新しい反對派が生れ、最初の段階でその成員の一人は、ナヂエスタ・コンスタンチノヴァ・クルブスカヤであつた。誰も彼もびつくり仰天したことは、彼等の第一人者ジノヴィエフ及びカメネフが、彼等自身、反對派による批評を一語々々そのまま繰返さざるを得なくなつたといふことで、間もなく彼等は、『トロツキイ主義者』の陣營のものとして、他から耳を傾けられた。我々の仲間において、ジノヴィエフ及びカメネフとの關係を親密にすることが、極く控目に云つても、^{オラトシキカル}逆説的に思はれたのは、少しも不思議ではない。反對派のうちにはさういふプロツクに反對したものが、多

數あつた。極く少數ではあつたがジノヴィエフ及びカメネフに反對して、スターリンとプロツクを結ぶことが可能だと考へたものすら若干あつた。私の親友の一人で、舊い革命家で、内亂の際の最も立派な司令官の一人であつたムラハコウスキーは、一切のプロツクに反對だと聲明し、彼等の立場を典型的に説明し、『スターリは、欺くだらうし、ジノヴィエフはこそく逃げ出すだらう。』と言つた。しかしさういふ問題は、心理的考慮によつてでなく、政治的考慮によつて、最終的に決定された。ジノヴィエフ及びカメネフは、一九二三年以來、彼等にたいする鬭争においては、『トロツキイ主義者』が正しかつた、と公然と告白した。彼等は我々の綱領の基礎的原理を承認した。さういふ事情の下において、彼等とプロツクを形成しないといふことは不可能であつた、特に、數千の革命的なレニングラードの労働者が、彼等の背後にあつた以上、さうだつたのだ。

^{*}セントピートルスブルグは、戦時中ベトログラードと改稱され、更にその後、レニングラードと改稱された。——英譯者

私は、この三年間、即ち彼がヂョルヂヤへ小旅行に立つ前夜以來、公式の會合以外には、カメネフと會つてゐなかつた。その夜、彼はレーニンと私とのとつた立場を展開すると約したが、その後レーニンの容體が險悪だと知つて、スターリンの方へ移つて行つたのだ。我々が最初に會つた時に、カメネフは『君とジノヴィエフが同じプラットフォームへ姿を現すだけで十分だ、黨は自身の眞の中央委員會を見出すだらう。』と叫んだ。私は、さういふ官僚的な樂天主義に嘲笑を禁ずることが出来なかつた。カメネフは、三幅對の三年間の活動が黨に與へた破壊的な結果を、明かに過少

評價してゐた。私は、彼の感情に少しの斟酌もなく、それを彼に指摘した。一九二三年の終り、即ちドイツにおける革命運動が敗北して後に、その端を發した革命的退潮は、國際的範圍に及んでゐたのだ。ロシアにおいては、『十月』にたいする反動が全速力で進行してゐた。黨の諸機關は、いよ／＼と右翼と結んでゐた。さういふ情勢の下で、我々のやる必要のあることは、手をつなぎ合ふことだけであつて、さうすれば勝利は熟した事實のやうに我々の足元へ落ちて來ると考へるのは、兒戯に類したことであらう。『我々は遠大な目標を持たなければならぬ』と、私は何十回となくカメネフ及びジノヴィエフに向つて繰返した。その契機の拍車に驅られて、私の新しい同盟者等は、この表式を勇敢に承認した。しかし長持ちはしなかつた。彼等は、一日々々、一時間一時間と、意氣沮喪して行つた。ムラハオウスキイは、彼等の個性の評價において正しいことを實證した。ジノヴィエフは結局、こそ／＼と逃げ出した。だが、彼は彼の支持者の全部によつて追隨されることなどは全くなかつた。とにかく彼の二重の方向轉換は、『トロツキイズム』の傳説の上に、遽す可からざる瘡傷を與へたのだ。

一九二六年の春、私の妻と私とはベルリンへ小旅行をやつた。モスコウの醫師達が、私の高熱の持續を説明することが出来なくなり、全責任を背負ふことを欲せず、私に外國へ旅行するやうにと勸告したのだ。私もまた同じく、『行詰り』からの出路を見出さうと焦慮してゐた、といふのは私の高熱が極めて重要な契機に私を無力にし、私の反對派の最も確乎たる同盟者として活動したからだ。私の外國訪問問題は、ポルトビュローで取上げられ、同局は、その手にせる報道と一般的政治情勢に鑑みて、私の旅行を極めて危険だと思惟すと聲明したが、最後の決定は私に委せた。その聲明には、私の旅行の許し難いことを述べたゲー・ペー・ウーの覺書が添へられてあつた。ポルトビュローは、疑ひもなく、外國に在る間私に何等か不愉快な出來事が起つた場合、黨がその責任を負ふことになるのを、恐れてゐたのだ。私を外國へ、しかもその場合コンスタンチノーブルへ追放すると云ふ觀念は、その時はまだ、スターリンの警官的頭腦のなかにも目醒めてゐなかつた。また、ポルトビュローが、外國の反對派を固めるために私が外國で活動しはしないかと懸念してゐたことも、あり得ることだ。それにも拘らず、私は、友達と相談した後、旅行に出ることに決意した。

ドイツ大使館との交渉は、支障なく完了し、四月の中旬、私の妻と私とは、教育人民委員省のウクライナ『同僚』の一員クズメンコの名で、外交官旅行券をもつて出發した。私の祕書で、以前の私の列車の司令官のセルムスクと、ゲー・ペー・ウーの代表とが、我々と一緒であつた。ジノヴィエフとカメネフとは、心からの感情を見せて、私と別れた。彼等は、スターリンと面と向つて止つてゐることの見透しを好まなかつたのだ。

戦争以前の數年間、私はホーヘンツォーレルンのベルリンを非常によく知つてゐた。當時、その都は、自身の特別な外貌をもつてをり、それを愉快なものだとは何人も言はなかつたが、多くの人々はそれを堂々たるものだと思つてゐた。ベルリンは變化した。いまやそれは、全く外貌といふも

のを持つてをらず、渺くとも私の發見し得るその何ものも持つてゐなかつた。この都市は、ながい、重い病氣——その行程には多くの外科手術が伴つた——から、徐々に恢復しつゝあつた。インフレーションは既にをはつたが、安定されたマルク相場は、一般的貧血症を測定する手段としてしか役に立たなかつた。街路において、店舗において、通行人の顔面に、貧窮化が感ぜられ、また同時に、かのいらいらした、屢々貪るやうな、再起の慾望が感ぜられた。戦争と、敗北と、ヴェルサイユの泥坊行爲の困難な数年の間の、ドイツの徹底性と潔癖性とは、おそろしい貧困によつて呑みつくされてしまつた。人間の蟻塚は、戦争の長靴によつて破壊された通路、廊下、倉庫を、頑強に、だが沈んだ心で、復興しつゝあつた。街路の階調のうちに、行人の動作や姿態のうちに、宿命觀の悲劇的な暗流が感ぜられた。『どうにも仕方がない、人生は無限の苦役の期間だ、我々はまたも最初から始めなければならぬ。』

數週間、私は、ベルリンの或る私立醫院で、醫學的觀察の下におかれてゐた。不思議な體熱の根源を求めて、醫師達は次から次へと私を轉々させた。最後に一咽喉専門醫は、その根源は私の扁桃腺にあるといふ假説を持ち出し、いづれにしてもそれを取除くやうにと勸告した。診察家や治療家は、中年の醫術的に劣つた人間だつたので、それを躊躇した。だが、外科醫は、過去に戦争の經驗をもつてゐたので、ひどい侮蔑をもつて、彼等を取扱つた。彼は、いまでは扁桃腺を取除くことは、髯を剃ると同じに容易だ、と言つた。私は承諾せざるを得なかつた。助手達は私の手を縛る用意をしてゐたが、その外科醫は、精神的保證を受入れることに決意し

た。私に力をつけさせる彼の諧謔の背後に、私は、緊張と、抑制された興奮を感ずることが出來た。テーブルの上に横たはつて、自身の血を堰止めることは、極めて不快な感じのものだ。手術は四十分乃至五十分つゞいた。萬事甘く行つた——たゞし、その手術が一見無効だつたといふ事實を見逃せばだ、といふのは、體熱は少し後になつて再び昇つたからだ。

しかし私がベルリンにゐた時日、渺くともその醫院で暮した時日は、無駄ではなかつた。私は、一九二四年八月以來殆ど完全にそれから切離されてゐたドイツの新聞紙に、耽溺した。毎日々々、私は一揃ひのドイツの公刊物及び若干の外國の公刊物を供給され、讀み了つた後で、私はいつもそれを床に投げ出した。私を訪ねた醫師達は、ありとあらゆる色彩の政治的意見を持つ新聞紙の敷物の上を歩かなければならなかつた。それは實際私にとつては、ドイツ共和政治の全配列に耳を傾ける最初の機會であつた。私は、そこに何等豫期しないものを見出さなかつたことを、こゝに告白しなければならぬ。軍事的崩壞の捨見としての共和國、ヴェルサイユの強制の産物としての共和黨、彼等自身それを握りつづした十一月革命の絞殺者としての社會民主黨、民主的大統領としてのヒンデンブルグ——一般に、それは私が想像したところとそっくりそのまゝであつた。だがしかし、目近かにその配列を見ることが出來るのは、極めて教訓的であつた。

五月一日に、私の妻と私とは自動車で市中へドライブに出掛けた。我々は、主要區域を訪問し、行列を見守り、ポスターを讀み、演説を聴き、アレキサンダープラッツへ赴き、群衆の中へまじつた。私は、メーデーの行列を澤山見たが、それは一層堂々として、一層裝飾的なものであつた。

が、私はよほど前から、何人の注意も惹かないで、私自身名もない全體の一部分と感じて、耳を傾けたり、観察したりして、群衆の中を動き廻ることが出来るやうになつてゐた。たゞ一度、我々の同伴者が注意深く私に言つた。『あそこに、貴下の寫眞を賣つてゐますよ。』しかしその寫眞から、何人も、教育人民委員省の『同僚』の一員クズメンコを認めはしなかつたであらう。この章句が、ウエスタツプ伯、ヘルマン・ミユラー、ストレーゼマン、レヴェントロフ伯、ヒルフアーディング、またはその他、およそ私のドイツ入國許可に反對した人々によつて讀まれる場合があるかも知れないから、私はこゝに次のことを彼等に報告しておく必要があると思ふ。私は、何等非難す可きスロガンも叫ばなかつたし、何等不法なポスターも貼らなかつたこと、そして概して私は、數日後に手術を受けるのを待つてゐる一觀光客に過ぎなかつたこと、これだ。

我々はまた市の郊外の『酒祭り』を見に行つた。こゝには人々が群をなしてゐた。渦巻と酒に煽られて、春らしい氣分であつたに拘らず、過去の數年の灰色の影は、宴樂の上にも、他を悦ばせようと骨折つてゐる人々の上にも、覆ひかぶさつてゐた。近く寄つて見ればすぐ分ることだが、彼等は誰も彼も、徐々に恢復しつゝある病上り者のやうに見えた。彼等の歡喜はまだ彼等には一つの大きな努力だつたのだ。我々は込み合ふ群衆のなかで數時間費し、觀察し、おしやべりをし、紙製の皿でフランクフルターを食べ、ビールを飲みさへした。その味は、我々が一九一七年以來忘れてゐたものだ。

私の手術した跡は急速に恢復しつゝあつて、私は出發の日取を考へてゐた。その時、今日になつ

てすら私に何等か謎のやうに思はれる、或る豫期しない事件が突發した。私が出發しようと思ふことであつた日より約一週間前、醫院の廊下に二人の紳士が現れた。彼等は、警察の仕事をしてゐることを極めてはつきりと表明してゐるところの、かのはつきりしない外貌を持つた紳士であつた。私は、窓から中庭を眺めて、そこに彼等と同じやうな約五六人の人間が私の下にゐるのを發見した。彼等に彼等自身では多少異つてはゐるが、それでもお互ひに著しく似通つてゐた。私はそれについてクレスチンスキイの注意を促した。數分間の後、副醫師の一人が戸をノックして、興奮して通報した——主任の言ひつけで——ところによると、私が生命を狙はれてゐる危険にあるといふのだ。『警官から狙はれてゐるのではないだらうねえ?』と、私は、澤山の警察の手先共を指して、訊ねた。その醫師は、警官はそこでその企てを阻止しようとしてゐるのだと、おそろしく仄めかした。二三分の後、一警部がやつて来て、クレスチンスキイに向つて、警察では實際私の生命を狙ふ計畫があるといふ報道を受取つたので、非常保護手段を講じたのだと語つた。醫院全體は上へを下への騒ぎであつた。看護婦達はお互同志や患者に云つた。この醫院にトロツキイをかくまつてあるので、それがもとで、この建物へ爆彈を投じようとしてゐるのだと。そこに醸し出された雰圍氣は、療養施設にはまつたくそぐはないものであつた。私は直ちにソヴィエツト大使館へ赴くやうに、クレスチンスキイと手筈を定めた。醫院の前面の街路は警官でバリケードがつくられてゐた。私は警察の自動車で護衛された。

この挿話の正式の説明は、次のやうなものであつた。或る新たに發見された隱謀に關聯して逮捕

されたたドイツの王黨派の一人が、裁判所の審問で次のやうなことを言つた——若くは云つたと公表された。即ちロシアの白衛軍が、ベルリンに滞在してゐるトロツキイの生命を奪はうと、早くから計畫をととのへてゐるといふのだ。私の旅行は曩にドイツの外務當局を通じて手配されたのだが、外務當局は故意に、それを警察に報告することを差控へてゐた。といふのは警察官の間には王黨員が非常に澤山ゐるからだ。警察では、逮捕された王黨員の報告には大して信用を置かなかつたが、それにも拘らず、その醫院に私が滞在してゐることについての彼の言説を耳にとめた。そこで調べた結果、その報道が正しかつたので、警察は非常に驚愕した。そこで醫師達について訊問がなされると同時に、私は時を同じうして二つの警告を受けたのだ……一つは副醫師から、他は警部からだ。さういふ計畫が實際企てられてゐたものかどうか、また警察は實際逮捕された王黨員から私の到着を聞いたのかどうか、その疑問には今日ですら、私は答へることが出来ない。

しかし私は、この事件はそれより遙かに單純なものではないかと思つてゐる。我々は次のやうに斷定してしまふだらう。外交官仲間は『秘密』を保つことに失敗した。そこで警察は、外交社會に信任のないことに腹を立て、ストレーゼマン又は私に、警察の援助がなくては扁桃腺を取除くことは出来ないといふことを示威しようとしたのだ。その説明は何れにせよ、醫院はすつかり轉倒してしまひ、一方私の假想的な敵にたいする素晴らしい警戒の下で、私は大使館へ引移つた。この物語の曖昧な、弱々しい反響が、後になつてドイツの新聞紙に現れたが、誰一人としてそれを信じようとする者はなかつたやうだ。

私のベルリン滞在の時日は、ヨーロッパにおける重要な出来事と時を同じうした。イギリスの總同盟罷業及びポーランドのビルストスキイのクー・デターがそれだ。この二つの出来事は、亞流共と私との意見の不一致を大いに重加し、我々の從來の鬭争の一層激しい發展を豫め決定した。こゝにこの問題について若干述べておかなければならない。

スターリン、ブハーリン及び——最初の時期に——ジノヴィエフは、ソヴィエツト労働組合の上層グループとイギリス労働組合の總評議會との間に外交的同盟を結んだことをもつて、彼等の政策の輝ける成功だと考へてゐた。彼の地方的狹隘性の故に、スターリンは、パーセル及びその他の労働組合指導者等は、或る困難な契機には、イギリスのブルジョアジーを向ふに廻してソヴィエツト共和國に援助を與へる用意をしてをり、若くはそれが出来ると想像した。イギリスの組合指導者に關しては、彼等は次のやうに信じたが、それには若干正當なものがあつた。即ち、イギリス資本主義が危機にあること、大衆の不満が増大してゐることに鑑みれば、ソヴィエツト労働組合の指導者と、公然ではあるが實際上責任のない友好關係を結び、それを媒介として彼等の左翼が掩護されるといふことは、イギリスの組合指導者にとつて利口なことであらうといふのだ。雙方ともに、大部分ものをその眞の名によつて呼ぶことを避けて、遠廻りをして他の心をさぐることはかりやつてゐたのだ。腐敗した政策は大事件に遭着して一度ならず難破した。一九二六年五月のイギリスの總同盟罷業は、イギリスの生活においてのみならず、我々の黨の内部生活においても、大きな出来事であることを自證したのだ。

戦後のイギリスの運命は絶大な興味の対象であつた。同國の世界的地位における急激な變化は、同國の内部の勢力關係に於ても、それと同様急激な變化を齎さずには出來なかつた。たとひイギリスも含めてのヨーロッパが、多かれ少かれ長い期間、一定の社會的均衡を回復することとして、イギリス自身は、一聯の重大な争闘と震動を媒介としてのみ、さういふ均衡に到達することが出来ることは、明かであつた。私は、イギリスにおいては、あらゆる場所で、石炭業における争闘が一箇の總同盟罷業を導いて來ることは、在り得ることだと考へてゐた。このことから私は、勞働階級の舊い組織と、その階級の新しい歴史的任務との間の本質上の矛盾が、近い將來に勿論露呈されるであらう、と斷定した。一九二五年の冬及び春、私はコーカサスにゐた間に、これについて一書——『イギリスは何處へ行く?』——を書いた。この書物は、イギリスの總評議會が左翼へ移つて行くこと、イギリス勞働黨及び勞働組合の平成員の間に漸次に、苦痛なくコンミニズムが浸透して行くことを期待して、本來ポルトビュローの公式の觀念を目ざして書かれたものであつた。一部は無用の紛糾を避けるため、一部は私の反對派を喰止めるために、私はこの書の原稿をポルトビュローへ提出した。元來それは、事實にたいする批評の問題であるよりも、寧ろ、豫見の問題であるので、ポルトビュローの委員の何人も、敢て意見を發表したものはなかつた。その書物は無事に檢閲を通過し、正確にそれが書かれたまゝで發行された。少し後になつて、それはイギリスにも現れた。イギリス社會主義の公式の指導者達は、その書物を目して、イギリスの事情を知らず、『ロシア』の總同盟罷業をイギリス嶋の大地に移植しようとする夢想し得る一外國人の幻想だとし

た。さういふ評價は、政治的凡庸較べでは決してなく、一等賞を得たマクドナルド彼自身を始めとして、數十の人々、數百の人々にとつてすら爲された。然しながら、それから數箇月のうちに、炭坑夫のストライキは總同盟罷業と成つたのだ。私は私の豫見がかくも早く確證されるとは豫期してゐなかつた。もしその總同盟罷業が、イギリス改良主義者の國産的評價に反對して、マルクス主義者の豫見の正しさを證明したとするならば、總同盟罷業中の總評議會の行動は、スターリンのパーセルにたいする期待の崩壊を標識したのだ。私は醫院にあつて、總同盟罷業の進行について、特に大衆とその指導者との間の關係についての一切の報道を、熱心に蒐集し、それを調べ合せて。私の胸をむかつかせたものは、モスコウの『プラウダ』紙の論文の性質であつた。その主要な關心事は、破産を覆ひ隠し、體面を保つにあつたのだ。このことをやり通す事は、事實を狡猾に歪曲するより外にはないのだ。革命的政治家の知的没落の實證として、大衆を欺瞞するより大いなるその實證はあり得ないのだ。

私はモスコウへ歸還すると、イギリスの總評議會とのブロックを即時に破棄せんことを要求した。ジノヴィエフは、彼に不可避の動搖を示した後で、私に賛成した。ラデックは反對した。スターリンはブロックに、ブロックラしいものにすら、嚙りついた。といふのは彼はそれだけにしか値しなかつたのだ。イギリス勞働組合主義者は、彼等の差迫つた内部の危機が終熄するまで待つてゐた。そしてその時に彼等の誠實であるが、頭の鈍い同盟者を無禮に蹴飛ばしてしまつたのだ。

まさにそれと同様重要な出來事が、同じ時に、ポーランドに起つてゐた。その小ブルジョアジ

1は、狂的に出路を求めて、叛逆を起し、ビルストスキイをその楯の上に乗せたのだ。共産黨の指導者ヴァルスキイは、『プロレタリアートと農民の民主的獨裁』が正に彼の眼前に發展してゐると決定し、コンミュニスト・インターナショナルに向つてビルストスキイの支持を要求した。私は久しい以前からヴァルスキイを知つてゐた。ローザ・ルクセンブルグがまだ生きてゐた間は、彼はおそらく革命家の伍列で、彼の地位を保つことが出来た。獨りに残されると、彼はいつも茫然自失した。一九二四年、非常に躊躇した後で、彼は、遂に『トロツキイズム』の害毒、即ち民主的獨裁の成功における農民の過少評價の害毒を理解した、と聲明した。彼は、歸服の報酬として、指導者の地位を與へられ、それから、それを獲得するのに爾く長い間かゝつた拍車を使用する機會の來るのを、しびれを切らして待つてゐたのだ。一九二六年五月、彼はその機會を掴んだが、それはたゞ彼自身の名譽を傷け、黨の旗に泥を塗つたに過ぎなかつた。もちろん、彼は罰せられずにすんだ。スターリン配下の機關は、ポーランド労働者の激怒から彼をかばつたのだ。

一九二六年中、黨内鬭争は、更にその強度を増して發展した。その秋には、反對派は、黨地方部の集會において公然の突撃すら行つた。諸機關は狂暴に逆襲した。觀念の鬭争は、行政上の技術に席をゆづつた。労働者の地域的集會に參列するための、黨官僚の電話での召集、一切の集會の面前でサイレンを鳴らす自動車の集積、プラットフォームに反對派が現れると、口笛を鳴らしたり、ブー音を立てたりする、立派に組織された妨害。支配的分派は、その勢力の機械的集中によつて、威嚇及び報復によつて、その抑壓を遂行した。黨の大衆は、何事かに耳を傾けたり、それを把

握したり又は何事かを言ふ時を得るまへに、分裂及び破局が來ることを懼れた。反對派は退却せざるを得なかつた。十月十六日に、我々は宣言を發し、我々の見解を正しいものと思惟し、黨の機構のなかでそのために鬭争する權利を保留するけれども、分列の危険を生む可き行動の使用を抛棄すると聲明した。十月十六日の宣言は、黨の機關を目當てとしたものでなく、黨の大衆を目當てとしたものであつた。それは黨内にとゞまつて、更に黨のために奉仕しようとする我々の欲求の表現であつたのだ。スターリン主義者は、それが締結された翌日、もうその休戰條約を破壊し始めたけれども、なほ我々は時間を獲たのだ。一九二六年——七年の冬は、我々に息拔きの時間を與へ、それは我々をして、多くの問題を更に徹底して理論的に検討することを許した。

一九二七年の初頭すでに、ジノヴィエフは、一擧にはないが、拗くとも徐々に、降服しようとして構へてゐた。しかしその時に、支那における人を仰天させるやうな事件がやつて來たのだ。スターリンの政策の犯罪的性質は、人の眼を射つた。それがしばらくの間、ジノヴィエフ及びその後彼に追隨した人々の降伏を延期させた。

支那における亜流共の指導は、ポリシエヴィズムの一切の傳統を踏みにじつてしまつた。支那共産黨は、その意志に反して、ブルジョア國民黨に結びつき、その軍事的規律に服従することを強制された。ソヴェエツトの創設は、禁止された。共産黨は、農民革命を阻止し、ブルジョアジーの許可なくしては労働者を武装させることを差控へるやうに、勸告された。蔣介石が上海の労働者を打ち碎き、軍閥の手に權力を集注した時よりもよほど以前に、我々は、さういふ結果は不可避だとの

警告を發した。一九二五年以來、私は國民黨から、コミニユニストの撤退を要求してゐた。スターリン及びブハーリンの政策は、革命の粉碎を準備し、それを容易ならしめたばかりでなく、國家機關による報復の援助をかりて、蔣介石の反革命事業を我々の批評から掩護したのだ。一九二七年四月、圓柱會館における黨集會の席上において、スターリンはなほ蔣介石との聯合政策を擁護し、彼にたいする信任を求めた。それから五六日後に、蔣介石は上海労働者と共産黨とを、血に浸してしまつたのだ。

興奮の波は黨を壓倒した。反對派は頭を擡げた。そして『コンスピラチヤ』（隠謀者）——その時、モスコウでは、既に我々は、『コンスピラチヤ』の方法を用ひて、蔣介石に反對して、支那労働者を擁護せざるを得なかつた——の一切の法則を無視して、反對派は、利権委員會の事務室に、群をなして私を訪問した。多くの若いコミニユニスト達は、スターリンの政策の明々白々な破産は反對派の勝利を近づけざるを得ないものと考へてゐた。蔣介石のクー・デターあつて後の最初の日の間、私は、私の若い友達の熱した頭の上に——及びそんなに若くない友達の頭の上に、バケツに幾杯もの冷水を注ぎかけないではをられなかつた。私は、反對派は支那革命の『敗北』の上には興隆することは出来ないといふことを、彼等に示さうと努力した。我々の豫見が正しいことを自證したといふ事實は、一千人、五千人、乃至一萬人の新しい支持者を我々の方へ惹き附けるかも知れなかつた。しかしながら、百萬人の人間にとつては、重要なことは、我々の豫見ではなくて、支那プロレタリアートが打ちのめされたといふ事實だつたのだ。一九二三年のドイツ革命の失敗の後、一

九二五年のイギリス總同盟罷業の壊滅の後、支那におけるこの新たな災禍は、×××××にたいする大衆の失望を増大するに過ぎなかつたであらう。しかも、スターリンの民族改良主義政策の主要な心理的源泉として役立つたものは、この同じ失望だつたのだ。

極めて短い期間に、一箇の分派として、我々が、疑ひもなく勢力を獲得したこと——云はゞ、我々が一層知力的に結合され、數において強力となつたことは、明かであつた。しかし我々が權力と結びつけてゐた情緒は、蔣介石の劍によつて斷たれた。彼の最後の不信なロシアの同盟者スターリンは、いまや、黨から反對派を驅逐することによつて、上海労働者の粉碎を完成せざるを得なかつた。反對派の背景は、舊い革命家のグループであつた。しかし我々はもはや獨りではなかつたのだ。新しい世代の革命家の數百人數千人が、我々のまはりに參集した。この新しい世代者は、十月革命によつて目を醒され、内亂に參加し、レーニンの中央委員會の大きな權威のまへに、直立してゐたものなのだ。一九二三年以來初めて、彼等は、獨りで考へ、批評し、發展の新しい轉回にマルクス主義的方法を適用し、且つ更に一層困難なこと、即ち、革命的創意の責任を負擔することを學び初めたのだ。現在、數千のかういふ若い革命家が在り、彼等は、スターリン統治の下の牢獄や流刑地において理論を研究することによつて、彼等の政治的經驗を増大しつゝあるのだ。

反對派の指導的グループは、その眼を大きく見開いて、この終曲に直面した。我々は、我々の觀念を、術策や遁辭によつてはなく、實際的結果は何一つもこれを避けることをしない公然の闘争によつて、新しい世代の共有財産となすことが出來たといふことを、餘りにも明瞭に理解したの

だ。我々は潰走の避く可からざる境涯に遭遇したが、しかし、一層遠い未来において、我々の觀念の勝利のために、道を拓きつゝあつたことを自信することが出来たのだ。

物質勢力の壓迫は、人類の歴史にいつも大きな役割を演じて來たし、いまも猶ほ演じてゐる。時としてそれは進歩的の役割であることもあるが、多くの場合、反動的な役割であつて、その如何は、いかなる階級がその力を用ひ、いかなる目的に用ふるかに依存してゐる。しかし、そのことから、暴力が『一切の』問題を解決し、『一切の』障礙に打ち勝つことが出来ると思ふのは、途方もないことだ。武器の力によつて、進歩的な歴史的傾向の發展を阻止することは可能だが、進歩的觀念の前進の道を永久に封鎖することは不可能だ。その闘争が、大きな原理のための闘争である場合、革命家の遂行し得る唯一の規則が、『どんなことがあつても、汝の義務を果せ。』であるのは、これが故なのだ。

一九二七年の終りに開かれる筈になつてゐた第十五回大會が近づくにしたがつて、ますます黨は歴史の十字路に到達したことを感じた。警戒心は黨内にみなぎつた。奇怪至極な恐怖手段にもかゝらず、反對派の聲を聞かうとする欲望は、黨内に目醒めた。これは非合法的手段によつてのみ、達成され得たものであつた。モスコウ及びレングラードのさまざまの部分に、祕密の集會が催され、それには男女兩性の労働者や學生が参加し、彼等は、誰か反對派の代表者の意見を聞かうとして、二十人乃至百人二百人とグループをなして参集した。一日の中に私は、二箇所、三箇所、時と

しては四箇所、さういふ集會を訪問した。それらの集會はいつも誰か労働者のアパートメントで催された。二つの小さな部屋が、人々で一杯になつてをり、演説者は二つの部屋の間の戸のところ立つてゐるのが常であつた。時としては凡ての者が床に坐つてゐることがあり、一層多くの場合には、その餘地がないので、討議は立つたまゝで行はざるを得なかつた。屢々、統制委員會の代表者達がさういふ集會に姿を現し、凡ての者に退去を要求することがあつた。彼等は討議に参加を求められた。もし彼等が何等か悶着を起した場合には、彼等は逐ひ出された。全部で約二萬人の人々が、モスコウ及びレングラードのさうした會合に参加した。その數は増大しつゝあつた。反對派は、曩に内部から占領されてゐた高等工業學校の講座で、巨きな集會を開く準備を、周到にとゝのへた。講堂には二千人の人々が薙めき合ひ、入れない大群衆が街上に残つてゐた。その集會を禁止しようとの政府の企ては、無効であつた。カメネフと私とが、約二時間演説した。最後に、中央委員會は、労働者に向つてアツピールを發し、反對派の集會を暴力によつて粉碎せよと言つた。このアツピールは、ゲー・ペー・ウーの指導の下に、軍隊によつて注意深く準備された、反對派攻撃の單なる隠蔽に過ぎなかつたのだ。スターリンはこの争闘を流血によつて解決しようと思つたのだ。我々は、大きな集會を一時中止するやうにとの合圖を與へた。しかしこれは、十一月七日の示威運動があつて後のことであつた。

一九二七年十月に、中央執行委員會がレングラードでその開期を開いた。その機會を記念するために、當局者は大衆的示威運動を舉行した。しかし豫測しない事情のために、その示威運動は全

く豫期しない轉向をやつたのだ。ジノヴィエフと私及び反対派の他の少數の人達は、示威運動の大きさと調子を見るために、自動車で市内を一巡してゐた。そのドライヴの終り頃に、我々は冬宮へ近付いたが、そこには中央執行委員會の委員の爲に、演壇として數臺の自動車トラックが引出されてあつた。我々の自動車は警官隊の警衛線のちよつと手前で止まり、その先にはもはや通路はなかつた。この『袋小路』をどうして抜け出ようか、まだ心を定めない前に、指揮官が我々の車のところへ急いでやつて来て、全く無心に、我々を演壇まで護衛して行つてやらうと申出たのだ。そして我々が躊躇してゐる間に、二列の警官隊は、まだ誰も乗つてゐない最後の自動車トラックまで、我々のために道を開いた。我々が最後の演壇に在るといふことを大衆が知つた時、示威運動の性質は即座に變化した。人々は、そこからの挨拶に答へることすらしないで、無關心に第一のトラックの側を通り過ぎて、我々の演壇へいそいだ。間もなく我々のトラックのまはりに數千の人々の人垣がつくられた。労働者と兵隊は、立ちどまり、見上げ、挨拶を叫び、それから先へ動いて行かざるを得なかつた、といふのは、彼等の背後に在る人々がいら立つて彼等を壓迫したからだ。秩序を回復するために我々のトラックへ送られた一隊の警官は、それ自身一般の氣分にとらへられてしまつて、何等動作をしなかつた。國家機關の信任された數百人の手先共が、群衆の眞直中へ派遣された。彼等は我々を口笛で彌次り倒さうとしたが、彼等の切離された口笛は、同情の絶叫によつて全く呑込まれてしまつた。このことが續けば續くほど示威運動の公の指導者にとつては形勢はますます堪へ難いものとなつた。結局、中央執行委員會の議長と、その最も秀でた委員の若干とが、その

まはりには廣い空虚な入江以外の何もものもない第一の演壇から下りて来て、いちばん端に在つて、ほとんど重要でない賓客のために設けられた我々の演壇へとよぢ上つた。しかしこの勇敢な方法をもつてしてすら、その場を救ふことは出来なかつた。それといふのは人々が名前を叫びつけてゐたからだ——しかもその名前は、その場の公の主人公等の名前ではなかつたのだ。

ジノヴィエフは忽ち樂天的になつて、この感情の表示から、重大な結果が生ずるものと期待した。私は、彼の衝動的評價に賛成しなかつた。レニングラードの労働者大衆は、反対派の指導者にたいするプラトニツクな同情の形で、自身の不満を示感した。しかし彼等ははまだ、國家機關が我々を片付けるのを阻止することが出来なかつた。この點に關して、私は何等の幻想も抱かなかつた。他方、この示威運動は、支配的分派にたいして、反対派の破壊を急速に行ひ、それを完成された事實として大衆の前におくやうにする必要を、示唆しないではおかなかつた。

次の地標は、十月革命の第十回記念に際しての、モスコウの示威運動であつた。示威運動の組織者、祝賀論文の筆者、及び演説者は、大部分、十月の出来事の間バリケードの反対側にあつたか、又は、何が起つたかを見得るまで、たゞ家庭の中に避難所を求めてゐて、確乎たる勝利が得られた後になつて始めて、革命に結びついて來た人々であつた。私が、その諸論文を讀み、その居候共が十月革命を裏切つたと云つて私を非難するラヂオ演説を聴くことは、苦々しいといふよりも、寧ろ愉快なことであつた。もし諸君が、歴史の過程の力學を理解し、如何に諸君の反対者が、彼の知らない手によつて左右されてゐる絲で引張られてゐるかを見た場合には、卑劣不信の最も嫌惡すべき

行動も、諸君にたいしてその力を失つてしまふのだ。

反対派は、自身のスローガンを書いたビラをもつて、一般行列に参加することに決定した。そのスローガンは決して黨に反対して構へられたものではなかつた。それは例へばかういふのだ。『我々の攻撃を右へ——クラーク、ネツブマン及び官僚へ向けよ。』……『レーニンの意志を遂行せよ。』……『日和見主義反対、分裂反対、レーニンの黨の統一賛成。』今日、これらのスローガンは、右翼にたいする闘争において、スターリン分派の公然の信條となつてゐる。十一月七日に、反対派のビラは、その手から奪ひ取られ、ずた／＼に引裂かれ、それを持つてゐるものは、特に組織された部隊によつて打擲された。公然の指導者等はレーニングレード示威運動で教訓を得て、この度は彼等の準備は遙かに有効であつた。大衆は不安の兆候を示してゐた。彼等は、深く惱んだ心をもつて、示威運動に参加したのだ。そして驚愕し、當惑した人々の上に、二つの活動的なグループ——反対派と機關と——がせり上つてゐた。『トロツキイ主義者』にたいする闘争への志願者として、有名な非革命的要素、時としては單なるファシスト要素すらが、モスコウの街路において、いまや機關の援助にやつて來つゝあつたのだ。一警官は、警戒を與へるのだといふ口實で、公然と私の自動車射撃した。誰か彼の手を導いてゐたのだ。消防隊の酔つぱらつた一役人は、呪詛の聲を放ちながら、私の自動車の踏臺の上へ飛び上り、ガラスを破壊した。その光景を見ることの出來た人にとつては、一九二七年十一月七日のモスコウの街路における出來事は、明かに、テルミドールの豫習であつた。

同様な示威運動がレーニングレードに起つた。そこへ赴いたジノヴィエフとラデツクとは、特殊部隊のために抑留され、群衆の暴行から保護するといふ名目で、示威運動のある間、ビルヂングの一つに監禁された。その日にジノヴィエフは、モスコウにある我々に書いてよこした。『我々の手にしてゐる一切の報道は、この暴行が大いに我々の運動を利するであらうといふことを示してゐる。我々は、君に何が起つたか、それを知り度いと藻掻いてゐる。接觸(即ち、労働者との秘密の討議)は、こゝでは非常に甘く運んでゐる。我々に有利の方への變化は、大きい。こゝしばらくの間は、我々はこゝを去るとは提議しない。』これが、ジノヴィエフの反対運動から出たエネルギーの、最後の閃光であつた。その翌日、もう彼はモスコウに在つて、降服の必要を主張してゐた。

十一月十六日に、ヨツフエは自殺した。彼の死は、生長しつゝある闘争への楔であつた。ヨツフエは重い病人であつた。彼は、日本——そこで彼はソヴェット使節だつた——から、重態になつて歸つて來てゐたのだ。彼が外國へ派遣されるについて、さまざまの障礙が加へられたが、彼の日本滞在は餘りに短か／＼つた。そしてそれは有利な結果を持つてゐたに拘らず十分に報いられるところがなかつた。ヨツフエは利権委員会で私の代理となり、一切の重い日常の事務が、彼にのしか／＼つた。黨内の危機は彼をひどく悩ました。最も彼を懊惱させたものは、陰謀であつた。幾度か彼は、闘争の眞直中へ身を投げ入れようとした。彼の健康を氣づかつて、私に彼を引きとめた。ヨツフエは、永久革命の理論に關聯しての反対運動に、特に憤激してゐた。彼は、單に革命の果實を享樂してゐるに過ぎない人々が、爾餘の者よりも遙か以前に革命の行程と性質を豫見した人

人にたいして卑劣な虐待を加へるのを、堪へることが出来なかつたのだ。ヨツフェは、永久革命の主題についてレーニンと交談したこと——もし私に誤りがなければ、それは一九一九年のことだ——を私に語つた。レーニンは彼に『さうだ、トロツキイは正しいことを自證した。』と言つた。ヨツフェはその會話を公表しようと思つてゐたが、私は、全力をつくして彼に思ひとまらせた。私は、雪崩を打つて彼に襲ひかゝつてくるであらう虐待を、まさしくと心に描くことが出来たのだ。ヨツフェは特に頑強で、物柔かい外貌の下に、不變の意志を隠してゐた。無智な進撃や政治的隱謀が新たに爆發する度毎に、彼は嫌惡に満ちた顰め顔をして、いつも私のところへやつて来て、『僕はあれを公表しなけりやならん。』と繰返した。私はいつも彼と議論をして云つた。さういふ『證人の證言』は、何ものも變化させはしないだらう。黨の新しいゼネレーションを再教育し、遠大な目標を抱くことが必要だと。

ヨツフェは外國での療養を完了することが出来ず、彼の容體は日に日に悪化するばかりであつた。秋になつて、彼はどうしても仕事を停止せざるを得なくなり、その時彼は全く打ちのめされてゐた。彼の友達は再び彼を外國へ送らうといふ問題を持ち出したが、このたびは中央委員會が露骨にそれを拒絶した。スターリン主義者は、いまや、反對派を全く別箇の方向へ送らうと準備してゐたのだ。私が中央委員會から、ついで黨から除名されたことは、他の何よりもひどく、ヨツフェを驚愕させた。彼の個人的及び政治的激怒に、彼自身の肉體上の不治といふ悲しい現實が加はつた。ヨツフェは、革命は危機に臨んでゐる、と誤りなく感じた。だが、もはや彼には戦ふ力がなかつ

た。鬭争から遠ざかつた生活は、彼にとつては、何ものをも意味しなかつた。そこで彼は、彼の最後の結末をつけたのだ。

その時、私は既にクレムリンから私の友達のピロポロドウの家に移つてゐた。彼は、ゲー・ペー・ウーの手先共によつて、何處へ行くにも後を尾けられてゐたが、形式上ではまだ内務人民委員であつた。ピロポロドウは、その時故郷のウラルへ赴いてゐて、其處で、機關にたいする鬭争において、労働者に接近しようと思つてゐた。私は、容體を聞かうと思つて、ヨツフェのアパートメントへ電話をかけた。彼が自身で答へた——彼の病床のそばに電話があつた。彼の聲の調子に——あとになつて始めてそれが分つたのだが——何等か不思議な、他を驚かすものがあつた。彼は私に來て欲しと言つた。何かの突然の用事で、私はどうしてもすぐ行く事が出来なかつた。當時の嵐のやうな日々には、重大な問題について私と協議するために、同志達がつゞけかけてピロポロドウの家を訪問して來たのだ。一二時間経つて聞き慣れない聲が電話で私に知らせた。『アドルフ・アブラモウイチが自殺しました。ベッドの側の卓子に貴方に宛てた包がめります。』ピロポロドウの家には、いつも數人の軍人出の反對派があつて、私が市へ出て運動するときに私に隨つて出る支度をしてゐた。我々はヨツフェのところへ急いだ。我々がベルを鳴らし、ノックしたのに答へて、扉の背後から誰か我々の名前を訊ね、それから少しばかりおくれて、扉を開いた。何等か不思議なことが内部に行はれてゐた。我々は部屋へ入ると、私は、血によこれた、枕をしたアドルフ・アブラモウイチの靜かな、無限にものやさしい顔を見た。ゲー・ペー・ウーの一員のBが、ヨツフ

エの机にかけてゐた。包はベッドの側の卓子から無くなつてゐた。私は、すぐそれを返すやうにと要求した。Bは口ごもり乍ら手紙などはなかつたと言つた。彼の態度と聲調から考へて、嘘をついてゐることは疑ひなかつた。數分間後には、市のあらゆる部分から來た友達か、その部屋へ流れ込み始めた。外務人民委員省及び黨施設の公式の代表者等は、反對派の群衆のまんなかで度を失つてゐた。その夜の間に、數千の人々がこの家を訪問した。書簡が盗まれたといふニースは全市にひろがつた。外國の新聞記者は電報を發してをり、この上、書簡を隠匿することがどうしても出來なくなつた。結局、その複製寫眞がラコウスキイに手交された。私に宛て、ヨツフェが書き、私の名を記した封筒に封緘された手紙が、何故にラコウスキイへ、それも原本でなく複製寫眞で與へられなければならなかつたのか、それは私が敢て説明しようと思つて企てることも出來ない事柄だ。ヨツフェの手紙は、結局、彼を反映したものだつたが、それも死の半時間前の彼だ。ヨツフェは彼にたいする私の態度を知つてをり、深い精神的信頼によつて私に結ばれてゐた。彼は、私が淺薄だと考へ、または公表に適しないと考へた箇所は、どんな箇所でもこれを抹殺する權利を與へたのだ。狡猾な敵共は、全世界の眼からその手紙を隠匿することに失敗したので、こんどは、一般に見せるために書かれたものでない正にその部分を、彼等自身の目的に利用しようと思つたのだ。

ヨツフェは、そのために彼の生涯をさへ上げたと同じ目的のために、彼の死をさへげようとした。半時間後に自身の額に向つて引金を引いたその同じ手をもつて、彼は、證人の最後の證言と、一友人の最後の忠告とを、書いたのだ。彼の最後の手紙で、直接に私に宛て、述べられたものは、かう

だ。

『親愛なレウ・タヴィドウィツチ、貴方と私とは、數十年の共同の活動によつて、且つ、私は敢てこれを期待しますが、個人的の友情によつて、お互ひに結ばれてゐます。この事は、いまお別れするに當つて、私から見て貴方が誤つてゐると思はれる點を貴方に述べる權利を私に與へます。私は、いまだ嘗て、貴方の指摘した道の正しさを疑つたことはありません。貴方の知られる通り、「永久革命」の日から、過去二十年以上、私は貴方と一緒に仕事をして來ました。しかし私は、いつもかう信じてゐます。貴方には、レーニンの不屈不撓の意志と、彼の何ものをもつてしても降服しない心と、將來大多數を制し、凡ての人が將來彼の道の正しさを認めることを豫見して、正しいと思つた道にたゞ獨りになつても踏みとどまる彼の用意とが、缺けてをります。政治的には、一九〇五年から始めて、貴方はいつも正しくありました。そして私が貴方に繰返し語つたやうに、私は、レーニンが一九〇五年においてすら正しかつたのは貴下であつて、彼ではないと承認したのを、私自身の耳で聞いてゐます。人は死に際して嘘は言ひません、そしていま私は、再びこれを貴下に向つて繰返します。……しかし貴方はこれまで屢々、過大評價した同意又は妥協のために、貴方の正しさを拋棄して來ました。これが誤りです。私は繰返して言ひます。政治的に貴方はいつも正しくありました、そして現在は、これまでよりも更に正しいのです。いつの日にか、黨はそれを理解するでせうし、歴史がそれを承認しないといふことはないでせう。ですから、たとひ何者かといふ貴方を去つたとしても、又は、我々みんなの欲してゐるほど多數のものが、我々みんなの欲してゐるほど速

かに、貴方のところへやつて来ないとしても、勇氣を失つてはなりません。貴方は正しい、しかし、貴方の正しさが勝利を得る保証は、極端に何ものをもつてしても降伏しない心と、峻厳なる眞直性と、一切の妥協の絶對的排斥以外の何ものゝ中にも存しないのです。まさにこのものゝうち、レーニンの勝利の祕密があるのです。これまで幾度か、私は、このことを貴方に言ひ度いと思ひました。が、いま始めて、最後のお別れの言葉として、私はそれを云つたのです。』

ヨッフエの葬式は、普通の勞働日に、モスコウの勞働者がそれに參列するのを阻止するやうな時間に行された。それにも拘らず、一萬人を下らない人々がそれに參列し、その葬式は堂々たる反對派の示威運動に轉化した。一方スターリン分派は、大會のための準備をととのへ、分裂を一箇の完成された事實としてその前におかうと急いでゐた。大會出席の代議員を選ぶ地方協議會への謂る選挙は、偽りの『討議』の公開の席上で行はれ、その間に軍隊的に組織された妨害者の集團は、お定りのファシスト的な遣り方で、集會を破壊したのだ。第十五回大會の準備以上に不名譽なものを想像するさへ困難だ。ジノヴィエフと彼の仲間とは、十月革命の第十回記念日にモスコウ及びレニングラードの街路で始まつた自然的群衆にたいして、大會が政治的弾壓を加へるであらうといふことを察知するのに、何等困難はしなかつた。ジノヴィエフと彼の友達の唯一の關心事は、まだその時間のある間に降伏することだつたのだ。スターリン官僚がその眞の敵と思つてゐるのは、第二位の反對派である彼等ではなくて、私と結びつけられた反對派の主要グループであることを、我々は理解し損じはしなかつた。彼等は、第十五回大會に當つて、私と明白に決裂することによつて、た

とひ優遇はかち得ないにしても、宥恕を購はうと望んでゐた。彼等は、二重の裏切によつて、彼等自身の政治的消失を達成するであらうといふことは、これを豫見しなかつたのだ。彼等は、我々のグループの背を刺すことによつて、一時我々のグループの力を弱めたが、同時に彼等自身に政治的の死の宣告を下したのだ。

第十五回大會は、集團的に反對派を除名することを決議した。被除名者はゲー・ペー・ウーの處置に委せられた。

第十一章 流 刑

中央アジアへの流刑について、私の妻のかいた記録をそのまま引用しよう。

『一九二七年一月十六日。朝はづつと荷作り。私は發熱してをり、たつた今クレムリンから持つて来たばかりで、私達と一緒に旅をするために荷作りされてゐる品物のなかで、私の頭は熱と衰弱でぐら／＼してゐる。家具、箱類、シャツ類、書籍及び際限のない訪問者——お別れを告げに来る友達——の混雜。私達の醫師で友達のエフ・エー・ゲエチエールは、私の風邪を氣づかつて、出發を延期するやうにと、素朴に私達に忠告した。私達の旅行がどんな意味のものか、いまそれを延期すればどんなことになるか、彼にはそれが分らなかつたのだ。私達は、汽車に乗込んだ方が、私の病

氣がもつと確實によくなるだらうと期待した、といふのは、家にゐて、私達の出発までの「最後の日」の状態の下にあつては、早くよくなる機會などはほとんどなかつたからだ。新しい顔が私達の眼のまへにつゞけかけて閃いてゐたが、その大部分は、私には初めて見る顔であつた。抱擁、握手、同情の表情及びお別れの言葉。花や、書籍や、糖菓や、温い衣類などをもつて来る人々によつて、混沌はさらに加つてゐる。雑沓、緊張及び興奮の最後の日は、終りに近づいてゐる。荷物はもう停車場へ運ばれた。私達の友達も其處へ行つた。私達は——家族皆なで——食堂に坐つて、出發の用意が出来、ゲー・ペー・ウーの役人の来るのを待つてゐる。私達は時間を注意する、九時三十九分だ……誰もやつて来ない。十時——汽車の出發する時間だ。何か起つたのか？ 取消しか？ 電話が鳴つた。ゲー・ペー・ウーから、私達の出發は延期された、理由は言はれないと言つて来た。幾日間？ とエル・デイ（レウ・ダヴィドウィツチのイニシャルで、トロツキイのこと——譯者）が訊ねた。二日間といふ返辭があつた——明後日出發しなければならぬことになりませう。『半時間の後、停車場から歸つて来た友達——最初に若い人達、それからラコウスキイその他——飛び込んで来た。停車場には物凄い示威運動があつたさうだ。人々は、「トロツキイ萬歳」を叫んで、待つてゐた。だが、トロツキイは何處にも見えなかつた。何處へ行つたか？ 私達のためにとつてあつた車臺のまはりに、嵐のやうな群衆があつた。若い友達が、その車臺の屋根へエル・デイの大きな肖像を掲げた。「ハラー」といふ歡呼で迎へられた。汽車は出發した。最初の車臺は他の車臺よりも急に跳び上つた、そして少しばかり動いて、急にとまつた。示威運動者達が、機關車の

前方へ走つて行つて、トロツキイを求めながら、車臺によぢ登つて、汽車をとめたのだ。ゲー・ペー・ウーがエル・デイを秘密に車臺のなかへ押しこめて、見送りに来た人々に彼の姿を見せるのを妨げてゐるのだといふ噂が、群衆の間に急に擴がつた。停車場での興奮は言語に絶するものがあつた。警官及びゲー・ペー・ウーの役人と、群衆との間に衝突があり、兩方に負傷者があつた。逮捕が行はれた。汽車は約一時間半、引きとどめられた。少し後になつて私達の荷物が停車場から持ち歸られた。それから長い間、友人達は、私達が家にゐるかどうかを確かめるため、また停車場で起つたことを知らせるために、電話をかけた。私達がベッドへ入つたのは眞夜中をすつと過ぎてからであつた。

『前數日間の懊惱の後のことで、私達は、翌日、十一時まで眠つた。電話の呼出しもなかつた。凡てが静かであつた。私達の長男の妻は、仕事に出て行つた——私達のまへにはまだ二日あつた。しかし朝食がすむかすまない中に、ベルが鳴つた。訪ねて来たのは、ピロポロドウの奥さんだつた。それからヨツフェの奥さんが来た。またベルが鳴つた——そして部屋には、普通服や正服のゲー・ペー・ウーの役人が、一杯になつた。逮捕下にある彼にたいして、護送を附して即時にアルマ・アマへ移送すると宣告した命令が、エル・デイに手交された。それならつい前日、ゲー・ペー・ウーの言つた二日間は、どうなつたのか？ またしても欺瞞だ——見送りの新たな示威運動を避けるための策略だ。電話は引續いて鳴つたが、一役人がそのそばに立つてゐて、上機嫌で、私達の返辭をするのを阻んでゐた。ほんの偶然な機會に、私達はやつとのことで、私達の家が占領されたこ

と、私達は暴力で運び去られるところだといふことを、ピロポロドウの奥さんに知らした。後になつて、私達は、見送りのこの「政治的指導」は、ブハーリンの仕事だと、知らされた。これこそ全く、スターリンの陰謀の精神に副つたものだ。

「役人共は、目に立つて興奮してゐた。エル・デイは自ら進んで離去することはこれを拒絶した。彼はこの機会をつかんで、事情をすつかりはつきりさせやうとしたのだ。ポリトビエローは、彼の流刑、ならびに尠くとも反対派中の最も重立つた者の流刑を、自發的の事柄のやうに見せようと腐心してゐたのだ。この流刑はさういふ工合に労働者に説明されてゐた。いま、この傳説を暴露し、どうしても事實を隠蔽し、又は歪曲し得ないやうに、事の眞實を示す必要があつた。だからエル・デイの決意は、彼の敵手をして、公然と暴力を使用するの止むなきにいたらしめた。私達は、二人の客と一緒に、一室に鍵をかけて閉籠つた。ゲー・ペー・ウーの役人との談判は、鍵をかけた戸を通じて行はれた。役人共は、どうしても命令を遂行しなければならぬから、暴力で戸を開けると、通告して來た。その間、エル・デイは、反対派の將來の行動のために、教示を口授してゐた。戸は鍵をかけたまゝであつた。私達は、鐵槌の打ち下される音を聞いた。硝子は破壊され、一本の制服の腕が中へ差し込まれた。「僕を射つ、同志トロツキイ、僕を射つ。」とキシキンが興奮して言ひつゞけた。彼は、屢々エル・デイに随つて戦線へ旅行した以前の士官だ。「馬鹿なことを云ふな、キシキン。」とエル・デイは靜かに答へた。「誰も君を射たうとはしてゐないよ。さあ君の仕事を進めたまへ。」

役人共は、戸を開き、混亂し興奮して、部屋へ入つて來た。エル・デイがスリッパを履いてゐるのを見て、彼等は靴をさがし出し、それを彼にはかせた。それから彼等は、彼の毛皮の外套と帽子を見つけ出し、それを彼に被せた。エル・デイは出ることを拒んだ。彼等は、腕で彼を持ち上げて立ち去つた。我々は後を追つた。私は、雪靴と毛皮の外套をつけて、滑り出た。私の後で戸がびしやりと閉つた。戸の向う側で、大騒ぎしてゐるのを私は聞いた。私は、エル・デイを階下へ運んで行く人々に向つて叫びかけ、私の息子達——長男は私達と一緒に流刑地へ赴くことになつてゐた——を外へ出すやうにと要求した。戸がだしぬけに押し開けられ、私の息子達は、私達の女の客、ピロポロドヴァ及びヨッフエと一緒に、飛び出して來た。彼等はみんな、セリョーザの體育仕込の手段をかつて、無理に出路をつくつたのだ。階段を下りながら、リョーザは戸のベルといふベルを全部鳴らして、叫びつゞけた。「同志トロツキイが運び去られるぞ！」驚愕した顔が、戸や階段に閃いた——この家には、優れたソヴィエットの働き手しか住んでゐなかつた。私達は全部、一臺の自動車に詰込まれ、セリョーザはほとんど足を入れることさへ出来なかつた。ピロポロドヴァも私達と一緒にだつた。

「私達は、モスコウの街路を驅つた。凍りつくやうな寒さであつた。セリョーザは帽子を被つてゐなかつた。それを取つてゐる時間ひまがなかつたのだ。誰も、上靴も手袋も持たず、私達の間に一箇の旅行用手鞆も、ハンド・バックすらもなく、みんなが手ぶらであつた。私達はカザン停車場へ送られてゐるのでなく、別の方向へ送られてゐた——進行するにつれて、それがヤロスラウ停車場の方

向であることが分つた。セリヨーザは、自動車の外へ飛び下りて、彼の兄の妻の働いてゐる場所へ走つて行つて、私達が運び去られてゐることを知らせようと企てた。役人共は、彼の腕を掴み、彼に自動車の外へ飛び出さないやうに、言ひ聞かせてくれと、エル・デイに訴へた。私達はがらんとした停車場へ着いた。役人共は、家から出た時と同じに、エル・デイを彼等の腕で持ち上げた。リヨーザは、さまざまの鐵道労働者に叫んだ。「同志達、同志トロツキイがどんなにして運び去られるかを見よ！」かつてエル・デイに随つて狩獵旅行に行つたことのあるゲー・ペー・ウーの一人役人が、リヨーザのカラーを掴んだ。「このぼろふら奴！」と彼は傲慢に叫んだ。セリヨーザは、彼の顔へ、體育で鍛へた一撃を喰はせて、それに酬いた。私達は車内へ入つてゐた。護送の人々は、私達の車室の窓や扉のところ居た。他の諸車室は、ゲー・ペー・ウーの役人共によつて占有されてゐた。私達は何處へ向つてゐるのか？ 私達はそれを知らなかつた。私達の客車一輛だけをつけて、機關車が出發した時まで、私達の荷物は送りとゞけられなかつた。午後二時だつた。私達は、迂迴して或る小さな停車場に向ひつゝあるので、其處で私達の車輛は、タシユケンドへ向けカザン停車場からモスコウを離れた郵便列車に連結されることになつてゐるのだといふことが、分つた。五時に、私達は、セリヨーザとピロポロドヴァにお別れを告げ、彼等はモスコウへ歸つた。『私達はその道を走りつゞけた。私は發熱してゐた。エル・デイは、快活で、ほとんど陽氣になつてゐた。形勢ははつきりした形をとり、一般の雰圍氣は清掃された。護送隊は、思ひ遣りがあつて、丁寧だつた。私達の荷物は、次の列車で送られて來て、フルンツ（私達の鐵道旅行の終點）で

——即ち九日目に私達に追ひつく筈だと、聞かされた。私達は、シャツの着換へも、一冊の書物も持つてゐなかつた。何と愛と注意をもつて、セルムクスとボズナンスキイが書籍を荷作りして、それを注意深く、これ／＼は旅行中に讀む分、これ／＼はすぐ研究する分と、分類してくれたことか！ エル・デイの趣味や習慣をよく知つてゐるセルムクスが、何と心を配つて、彼の書きもの材料を荷作りしてくれたことか！ 彼は、革命の間、速記者及び祕書として、幾度も幾度もエル・デイと旅行したのだ。エル・デイは、旅行中、電話の申出や訪問者のない時を利用して、いつも三倍のエネルギーを出して勞作したが、この仕事の主なる負擔は、最初はグレーズマンに、後にはセルムクスに落ちかゝつたのだ。そしていま私達は、一冊の書物も、一本のペンも、または一枚の紙をもたずに、長い旅程に上つてゐるのを見出した。モスコウを去る前に、セリヨーザは私達に、トルケスタンに關するセムヨノフ・タンシヤンスキイの書物——科學的な著述——を持つて來てくれたのだ。私達は、汽車旅行中に未來の私達の住地——それについては私達は、ぼんやりした觀念しかもつてゐなかつた——についてよく知つておかうと計畫してゐたのだ。だが、セムヨノフ・タンシヤンスキイは、爾餘の荷物と一緒に旅行鞆におさめられて、モスコウに取残された。私達は、あたたかも市内の一地點から他の地點へ運ばれてゐるかのやうに、手ぶらで、客車のなかに坐つてゐた。夕方、私達は長椅子の上に寝そべり、肘枕をして休息した。客室の扉は半ばひらかれて、そこに見張番が立つてゐた。これから先どうなることか？ 私達の旅行は何に似てゐるだらうか？ として流刑地は？ 其處での私達の境遇はどうであらう？ 出發の際は、はなはだ頼もしいものでは

なかつた。それにも拘らず私達は静かに落付いてゐた。客車はなめらかにころげた。私達は長椅子に横たはつて、手足を伸ばしてゐた。半ば開かれた扉が、私達に、私達が囚人であることを想はせた。私達は最後の数日の驚愕事と、不安と、緊張とのために疲れ切つてゐた、そしていま私達は休息しつゝあつたのだ。凡てのものが静かで、護衛は沈黙してゐた。私は、少し気分が悪かつた。エル・デイは、私を樂にするために、彼の考へ得られる凡てのことをしてくれしたが、しかし、私に與へるものとしては、彼の快活な、ものや、さしい気分以外、何一つもつてゐなかつた。私達は、私達を取巻いてゐるものゝことを考へるのを止めて、休息を享樂してゐた。リョーヴァは次の客室にゐた。モスコウでは、彼は反對派の仕事にすつかり没頭してゐた、そして今は、私達の運命を明るくするために、私達と一緒に流刑地へ赴きつゝあつたのだ——彼は妻に別れを告げる時間さへ持たなかつた。その瞬間から、彼は、外界と交渉する上の私達の唯一の媒介となつた。車内はほとんど眞暗であつた。扉の上に蠟燭が薄すぼんやりと燃えてゐた。私達は絶間なく東の方へ動いて行つてゐた。

『モスコウを遠く離れれば離れるほど、護送隊はますます親切になつた。サマラで彼等は、下着の着換へ、石鹼、齒磨粉、ブラツシなどを持つて来てくれた。私達の食物と護送隊のそれとは、ステーション附の食堂から運ばれた。これまでいつも嚴重に制限された食事を攝らざるを得なかつたエル・デイは、いま、食卓に供へられたものを全部、樂しげに食ひ、リョーヴァと私にからかひつゝけた。私は、驚きと理解をもつて、彼を見守つた。サマラで私達に提供された品物に特別の名稱が與へられた——手拭は「メンジンスキイ」と名づけられ、靴下は「ヤゴタレ」「メンジンスキイの代理」と云つた風に。さまざまの品物は、さういふ名前でもつて、非常に愉快なものになつた。列車の進行は、吹雪のために甚しく阻害された。だが、日一日と私達は深くアジアへ入り込んで行つた。

*當時のゲー・ペー・ウーの長官——英譯者

『モスコウ出發以前に、エル・デイは古くからの彼の二人の助手を伴つて行き度いと要求したがこれはその筋から拒絶された。そこでセルムスクとボズナンスキイとは、私達と同じ汽車で、獨立で旅行することに決めた。あの嘘になつてしまつた出發の時に、彼等は他の客車に坐つて、示威運動を見てゐたが、私達と同じ汽車にゐるものと思つて、彼等の坐席を離れなかつた。しばらく経つて彼等は、私達のゐないことを發見し、アリースでその汽車を下りて、次の汽車で私達の來るのを待つてゐた。私達が彼等を發見したのは、其處であつた。彼等の姿を見たものは、一定の自由を許されてゐたりリョーヴァだけであつたが、それは私達みんなを非常に幸福にした。こゝに、その時、私の息子の書いた記録がある。

『朝、私は停車場へ出た、といふのは、私達が絶えずその身の上について語り、心配してゐた同志達を、ひよつとしてそこに見つけはしまいかと思つたからだ。そして私は見つけた、其處に彼等の二人は、小飲食店のテーブルについて、將棋弄んでゐたのだ。私の歡びは各状すべからざるものがあつた。私は彼等に、私に近づいて來ないやうにとの合圖をした。その小飲食店へ私が入つたこ

とは、お定りのやうに、役人共の活動を増さしめた。私は、この発見を告げるために客車へ急いだ。みんなが心から歡んだ。彼等は、訓令に従はないで、彼等の旅行をつゞける代りに其處で凡ての人々のまへで待つてゐた——不必要な冒険——のであつたが、エル・デイですら彼等をさへぎることの困難なのを見出した。エル・デイと打合せた後、私は覺書をかき、それを暗くなつてから、彼等に手渡さうと思つた。訓令はかうであつた。ボズナンスキイは我々から離れて、即時にタシユケンドへ赴き、そこで招致を待つてゐなければならぬ。セルムスクは我々と會はないで、アルマ・アタへ行く可きである。私は通りがりにやつとのことでセルムスクに、停車場裏の、ランプのついてゐない、人の眼にたゞない隅つこへ来て、私に會ふやうにと告げた。ボズナンスキイが其處へやつて来た、最初、私達はお互ひに見分けがつかなかつた、それから惱まされ始めた。私達が會つた時、お互ひに早口にしゃべり、絶へず相手の言葉を遮つた。『戸を粉砕して、腕で運び出された！』と私は彼に言つた。いつたい誰が粉砕したのか、どんな理由で運び出されたのか、彼は理解することが出来なかつた。それを説明してゐる時間がなかつた、私達は発見されるのを懼れてゐただ。その會合は何等の面倒も生み出さなかつた。』

『アリスでの私の息子の発見の後には、私達は、この同じ列車に一人の信頼すべき友達と一緒に乗つてゐるといふことを、絶えず感じてゐた。それが私達を非常に幸福にした。十日目に私達は荷物を受けとり、早速セムヨノフ・タンシヤンスキイに飛びついた。私達は、自然の風物、住民、林檎園のことを讀み、何よりもよかつたのは、そこが狩獵にいゝところだと知つたことだ。エル・デ

イはセルムスクが荷物にしてくれた書きもの材料を、うれしがつて取り出した。私達は、朝早く、フルンツ（ピスベック）へ到着した。これが最後の停車場であつた。身を囁むやうな霜だ。純白の雪の上へそゞぎかけて来る太陽の光線で、私達の目がくらんだ。私達はフェルト靴と、羊の皮を與へられた。私は着物の重味で、呼吸をすることも出来なかつたが、往來の上は寒かつた。乗合自動車は、諸車で固められたキイキイ音を立てる雪の上を、のろ／＼と動いた。風が私達の顔を切つた。三十キロメートル進んで、私達は停まつた。暗かつた。私達は雪で覆はれた荒野の真中にゐるやうであつた。二人の護衛（護送隊は十二人から十五人であつた。）がやつて来て、多少當惑した口調で、宿泊所が甚だよくないと言つた。私達は、ちよつと骨を折つて乗合自動車を出て、闇の中を手さぐりでそこを歩き、郵便局の戸口と低い戸をさがして中へ入り、羊の皮をぬいでホツとした。だがその小屋は、温められてなかつたので、寒かつた。小さな窓はすつかり凍りついてゐた。隅に巨きなロシア式のストーヴがあつたが、あゝ！氷のやうに冷かつた。私達は茶で體を温め、何かを食つた。私達は、その郵便局の女主人のユサクク女と雑談した。エル・デイは、彼女の生活や、また狩獵のことなど、いろいろのことを彼女に訊ねた。凡てのものが私達の好奇心をそゝつた。ただ、凡てがどんな工合に結着するのか、それが私達に分らないことだつた。私達は、夜の支度をし始めた。護送隊は附近で泊り場所を見つけた。リョーヴァは長椅子に横たはり、エリ・デイと私とは、大きなテーブルの上へ羊の皮を敷いてやすんだ。おしまひに私達みんなが、天井の低い、冷い部屋に、靜かに横たはつた時、私は思はず吹き出した。「クレムリンの部室アパートメントと何とまあ似てもつかないところでせう！」と私が言つた。エル・デイとリョーヴァは、私と一緒に笑つた。

『夜明けに、私達は出發した。私達のまへには、この旅行で最も困難な場所が横たはつてゐた。私達は、カーデー山脈を横切つた、嚴寒だ。着物の重味はとも堪へられなかつた——ちやうど壁が落ちて、その下になつてゐるやうであつた。茶をとるために次に停車した時、私達は、運轉手と話をし、私達を迎へにアルマ・アタからやつて來たゲー・ペー・ウーの役人と話をした。次第々々に不思議な、未知の生活が、我達のまへに展開されつゝあつた。道は、自動車の運轉には困難で、ガラスのやうな路面に雪が吹きつけてゐた。運轉手は巧に車をあやつつた。彼はこの道の特殊性をよく知つてゐた。そしてウオツカで體を温めてゐた。夜になると、霜はますますきびしくなつて行つた。運轉手は、この雪の荒野で、萬事が彼に掛つてゐることをよく知つてゐたので、官憲や彼等の一般政治に極めて亂暴な批評を浴せて、それで彼の感情を和げてゐた。彼の側にかけてゐたアルマ・アタの代表者は、無難に家へたどりつくために！宥めるやうに何事かを彼に語つてゐた。朝の三時に、車はあやめも知らぬ闇の中に停つた。私達は到着したのだ。しかし何處へ？それが、ゴーゴリ町の、「ヅエテイサ旅館」の前であることを、私達は知つた——疑ひもなく、ゴーゴリの時代からつゞいた旅館だ。二つの部屋が私達に與へられた。それに隣つた部屋には、護送隊とゲー・ペー・ウーの地方役人とが陣取つた。リョーヴァが私達の荷物を調べた——下着と書物の入つた二つの鞆が、どこか雪の中で落ちて、失はれてゐた。あゝ！私達はまたセムヨノフ・タンシヤンスキイと離れ、支那と印度に關するエル・デイの地圖と書物が無くなり、書きもの、材料がなくなつ

た、十五對の眼——だが、彼等はその荷物を甘く見つけ出すことは出来なかつた。

『朝、リョーヴァは踏査に出かけた。彼は、町をよく見て廻り、第一は、私達の生活の中心たる可き郵便電信局を知つた。それから藥店を發見し、一切の必要な物品——ペン類、ペン軸、麴包、バター、及び蠟燭を疲れもせずに搜した。……最初の數日、エル・デイと私とは、決して私達の部屋を離れなかつた。その後、私達は夕方に一寸した散歩をするために外へ出るやうになつた。私達と外界との一切の連絡は、私達の息子を通じて行はれた。

『夕食は、附近の食べ物物屋から持つて來た。リョーヴァは終日忙しかつた。私達は、しびれを切らして彼を待つてゐた。彼は、その人民や町の生活についてのさまざまの報道の斷片や、新聞紙をもつて來た。私達は、セルムクスがアルマ・アタへ到着したかどうか、それを知り度いとあせつてゐた。そこへ着いてから四日目の朝に、不意に、私達は廊下に耳慣れた聲を聞いた。何となつかしいことであつたか！私達は、扉の後から、心を張りつめて、セルムクスの言葉と、足音に聴き耳を立てた。彼の到着は、私達のまへに新しい展望を開いた。セルムクスはちやうど私達と向ひ合つた部屋を與へられた。私は廊下に歩み出で、彼は遠くから私に會釋した。私達はまだ彼と會話する危険を冒すことは出来なかつたが、彼の近くにゐることを悦んだ。翌日、私達はこつそりと彼を私達の部屋に入れ、取急いでこれまで起つたことを語り、將來の私達の共同の仕事のプランを立てた。だが、その將來は、極めて短いものとなつてしまつた。まさにその夜、十時に、終りが來たのだ。旅館内は靜かであつた。エル・デイと私とは、鐵製ストーヴで部屋が堪へられないほど熱くな

るので、冷い廊下の方へ扉を半分開いて、私達の部屋に坐つてゐた。リョーヴァは彼の部屋にゐた。私達は、廣間にフェルト靴の物柔かい、注意深い音を聞きつけ、ちつと聴き耳を立てた。(後で知つたことだが、リョーヴァもそれを聞きつけ、何が起つてゐるかを察知した。) 彼等がやつて来た、といふ考へが私の心に閃いた。私達は、誰かゞノックをしないでセルムクスの部屋へ入つて、「さあ、急げ！」と言ふのを聞き、それからセルムクスが「フェルト靴を穿くまで待つてもいゝだらう？」と答へるのを聞くことが出来た——明かに彼はスリッパを穿いてゐたのだ。ふたゝび物柔かい、ほとんど物音を立てない足音、それから深い沈黙。その後で戸番が来て、セルムクスの部屋に鍵をかけた。私はその後再び彼を見なかつた。彼は、數週間、罪人達と一緒にアルマ・アタのゲイ・ペー・ウーの屯所に、飢饉率の割當食料でとゞめおかれ、それから一日二十五コベック——それだけでは麩包を買ふにも足りなかつた——のあてがひ扶持で、モスコウに送られた。ボズナンスキイは、後で知つたにのだが、同時にタシュケンドで捕へられ、モスコウへ送られた。約三箇月後、私達は、彼等の流刑地から、彼等からの通信を受取つた。仕合せなことには何等かの偶然で、彼等は東部へ移送される途次、同じ列車の、向ひ合つた座席につかせられた。彼等はしばらく別れてゐた後、かうしてめぐり合つたが、それはたゞ再び別れるためだつた。彼等は異つた場所へ流刑になつたのだ。

『そんな工合で、エル・デイは助手達を持つことが出来なかつた。彼の敵手は、その助手達がエル・デイと共に革命に忠實に奉仕した廉で、彼等に復讐したのだ。上品な、おとないしグレーズマ

ンは、早く既に一九二四年に自殺に追ひやられた。ブトフ、あの黙つて勤勉に仕事をしたブトフは、逮捕され、虚偽な證言を強ひられ、ハンガー・ストライキに追ひこまれ、その結果、監獄病院で死んでしまつた。エル・デイの敵達が、一切の災害の源だとして、神祕的な嫌惡をもつて眺めた「祕書團」は、こんな工合にして、結局、根こそぎ持つて行かれた。敵達は、もうエル・デイは、遙か遠方のアルマ・アタで、完全に武装解除されたと考へた。「彼はたとひ彼處で死んでも、我々はすぐにはそれを耳にすることが出来ないだらう。」とヴォロシロフは大びらに、心よげに言つた。だが、エル・デイは武装解除されはしなかつた。私達は三人で協同作業を組織した。外界との接觸を保つ仕事は、私達の息子の責任となつた。彼は通信の衝に當つた。エル・デイは時々彼を外務大臣と呼び、時としては遞信大臣と呼んだ。我々の通信は間もなく巨大な量となり、その負債がリョーヴァにかゝつた。と同時に彼は護衛者であつた。彼はまたエル・デイのために文筆上の仕事の材料を見つけ出し、書庫の書棚を捜して來、新聞紙の號數を揃へ、拔萃を寫し取つた。彼は地方官憲と一切の交渉を受け、狩獵旅行の準備をし、獵犬と獵銃の世話をした。そしてその最中で、彼は經濟地理と語學とを孜孜として勉強した。

『私達が到着してから數週間後、エル・デイの科學的な、政治的な勞作は、すでに全速力で進行してゐた。その後、リョーヴァは、少女のマイピストを見つけ出した。ゲー・ペー・ウーは彼女に干渉はしなかつたが、彼女を強制して、私達のために彼女がマイプライターで打つた凡てのものを報告させたことは、明かであつた。トロツキイズムにたいする闘争に、まるで經驗のないこの少女の

報告を聞いたら、面白いものであつたらう。

『アルマ・アタで綺麗なものは、純白で、清浄で、乾いた雪であつた。歩いたり、車を驅つたりすることが極く稀だつたので、雪は多中その清新さを保つてゐた。春になると、それは赤い罌粟に席をゆづつた。何と澤山の罌粟か——巨大な絨毯のやうだ！ 草土帯は數哩の間、眞赤に燃え立つた。夏になると林檎が出来た——有名なアルマ・アタ種の、巨きくて、やはり赤いのだ。町には中央給水場もなく、電燈もなく、舗道もなかつた。町の中央の市場では、キルギス人がその店舗入口の、泥の中に坐つて、陽光で體を温め、蚤や虱をもそ〜とつてゐた。マラリヤが蔓延してゐた。またそこにはペストがあり、夏の數箇月には、狂犬が非常な數に上つた。新聞紙は、この地方での多くの癩病患者の發生を報じた。

『こんなことがあつたに拘らず、私達はいゝ夏を過した。私達は、或る果樹園主から丘の上の百姓家を借り受け、そこからは雪をいたゞいた山脈、天山々脈の嶺々が眺められた。その園主や家族と一緒に、私達は、熟した果實を眺め、彼等の仲間になつてそれを採取した。果樹園は變化する繪であつた。第一に白い花、それから樹々が重くなり、しなつた枝々にはつゝかひ棒がされた。つぎには果實が、樹の下の蘂庭におかれて、雑色の絨毯をこしらへ上げ、重荷を取除かれた樹々は、ふたたび枝々をまつ直ぐに伸ばした。果樹園は、熟した林檎や梨の匂ひで一杯になり、蜜蜂や地蜂がブンブン飛んだ。私達は糖菓をこしらへてゐた。

『六月と七月に、林檎園の小さな蘆屋根の家の中で、仕事は全速力で進み、絶えまなくタイプライ

ターがかち〜と鳴つた——これはこの地方では未知のものだつた。エル・デイは、コンミニュニスト・インターナショナルの綱領の批評を口授し、その訂正をやり、それをふたゞび繰返してタイプライターに打たせてゐた。郵便物はどつさり——あらゆる種類のテーゼ、批評、内政上の論争を記した日に十通から十五通の手紙、モスコウからのニュース、及び政治問題に關する電報、エル・デイの健康について問合せであつた。大きな世界の諸問題が、こゝで重大なものに見えたヨリ小さい地方問題と混り合つた。ソスノウスキイの書簡は、彼の例の熱心と辛辣で、いつも新しい題目をとらへてあつた。ラコウスキイの立派な手紙は、私達がそれを寫して、他の人々へ送つてやつた。その小さな天井の低い部屋には、原稿、綴込み、新聞紙、書物、寫し取つた拔萃、及び切抜の一杯にひろげられたテーブルが、詰め込まれてゐた。リョーヴァは、終日、既の隣の彼の小さな部屋にとぢ籠つて、タイプライターを打つたり、タイプストのコツピーを訂正したり、包をこしらへたり、郵便物を送り出したり、受取つたり、必要な引用文を捜し出したりしてゐた。郵便物は、馬でやつて来る廢兵が、町から私達のところへ持つて來た。夕方、犬をつれ鐵砲を持つて、エル・デイはよく山へ登つて行き、時には私を、時にはリョーヴァをつれて行つた。私達はいつも、鶉、山鳩、山鶉、又は雉子をもつて歸つた。マラリヤの規則的に再襲して來るまでは、凡てが甘く行つてゐた。『かうして私達は、鐵道から二百五十キロメートル、モスコウから四千キロメートル離れた、支那國境の天山山脈の麓の、地震と出水の町、アルマ・アタに一年を過し、手紙と、書物と、自然と共に、一年を過した。私達は、あらゆる場合に祕密の友達と行き合つたが（これについてこれ以上言

ふのは、まだ餘りにはやすぎる。しかし外面的には私達は、周囲の住民からは完全にかけ離れてゐた、といふのは、私達と接觸しようと試みた者は誰でも、罰せられ、時としては嚴罰に處せられたからだ。』

妻の記録に、私は、その時代の通信文書からの若干の抜萃を附け加へておかう。二月二十八日、即ち我々が到着してからすぐ後で、私は若干の流刑にされてゐる友達に書き送つた。

『カザクスタン政府が近い中にこゝへ移轉するので、家屋といふ家屋は登録されてゐる。我々は、モスコウの最も高貴な御方へ私の送つた電報のお蔭で、三週間ホテル住ひをした後で、遂に一軒の家を與へられた。我々は、家具類を買ひ、こはれたストーヴを修繕し、一般に家庭を建設——國家的設計に基いてではないが——しなければならぬ。この仕事は、ナタリヤ・イヴァノヴナとリョーヴアの役目だ。その家庭建設は今日まで完成されてゐない、といふのはストーヴはまだ温められないだらうからだ。……』

『私は、アジア、その地理、經濟、歴史、等の研究に多大の時間を與へてゐる。私は外國の新聞に非常に缺乏してゐる。私はすでに必要な場所へ手紙を送つて、最近のものでなくてもよいから、新聞紙を送つてくれるやうに頼んだ。郵便物がこゝへ到達するのは困難で、時々紛失する。』

『印度共産黨の役割は、理解することが困難だ。諸新聞紙は、もろくの地方における「労働者農民黨」の活動を報じてゐる。この名稱は、警戒心を呼び醒すが、それは理由のあることだ。國民黨も亦、ある時は労働者農民黨であると宣言したのだ。これは過去の繰返しとなりはしないだらうか？』

『英米の對立は、遂に、重大な形をとつて表面へ浮び上つた。いまは、スターリン、ブハーリンですら、その紛議が何であるかを理解し始めてゐるやうだ。だが、我々の諸新聞紙は、強化しつゝある英米の對立が、眞直ぐに戰爭に赴くものであるかのやうに、情勢を説明してゐるが、これは問題を單純化するものだ。この過程において幾多の回轉點のあるであらうことは、これを疑ふことは出來ない。それといふのは、戰爭は雙方にとつて餘りにも危険なものだからだ。彼等は、一度ならず協定と平和を達成しようとするであらう。しかし一般的に言へば、その過程は流血の終曲に向つて大きな歩武で、發展しつゝあるのだ。』

『こゝへ来る途中で、私は初めてマルクスの小冊子「フォークト氏」を讀んだ。カール・フォークトのやつた數十の誹謗を論駁するために、マルクスは文獻や證人の證言を動員し、直接證據や狀況證據を解剖して、細かい字體で、二百頁の書物を書いた。……もし我々が、同じ規模でスターリンの誹謗を論駁し初めたら、おそらく一千冊のエンサイクロペヂヤを公刊しなければならぬだらう。』

四月に私は、『新入生』と、狩獵の仕事での苦樂を分つた。『私の息子と私は、春の獵期を出来るだけ満喫しようとして、イリ河へ小旅行を試みた。こんどは我々は、土着民の「ヤールマス」(小屋)で眠らなくてもいゝやうに、天幕、毛皮、毛皮のコート等を携帶して行つた。しかしふたゝび雪が降つて、天氣は嚴しい寒さに變つた。苦しい數日であつ

た。夜は氣温が十四度に下つた。それにも拘らず、我々は九日間家の中へ入つて行かなかつた。温い下着と、澤山の温かい衣物のお蔭で、我々はほとんど寒さに苦しまなかつた。だが、我々の長靴は夜の間に凍つてしまふので、穿くまへに火にかざして柔かくしなければならなかつた。最初の數日間、私達は沼池で狩獵し、その後は廣濶な湖でやつた。私は小さな丘に小さな天幕を張り、そこで一日十二時間から十四時間費した。……だが、リョーヴァは樹の下の蘆のなかに突立つてゐた。

『しかし天候が悪いのと、獵物が不規則に飛んで來るのとで、狩獵旅行としては成功でなかつた。我々は四十羽ばかりの鴨と、一對の鷺鳥をもつて歸つただけだ。しかしその旅行は、私に無限の快樂を與へた、特に、野蠻状態へのこの一時的な侵入、大氣の中でこの睡眠、天空の下で桶の中で料理した羊肉の食事、洗濯もしなければ着物をぬぎもせず、お終ひに着物をつけずに馬上からすぐ河の中へ飛込むこと（午後の太陽の下で、私が着物をぬがなければならなかつたのは、この時ただ一度だ。）水と蘆のまんなかで小さな丸太の棲木（トビノキ）の上に、ほとんど終日終夜を送つたこと——こんな經驗にはそんなに屢々出會ふものではない。私は風邪の氣味すら覺えないで、家へ歸つた。が、家へ着いて後二日目に、私は風邪を引いて、一週間寝てしまつた。

『いま外國の新聞は、ラコウスキイの手を通じて、モスコウ及びアストラハンから來初めた。彼は、マルクス・エンゲルス研究所のために、サン・シモン主義に關する著述に従事してゐる。この外に彼は、回想録を書いてゐる。ラコウスキイの生涯について何事かを知つてゐる者なら、誰で

も、彼の回想録が何と素晴しく興味を與へるものであるかを、容易に想像することが出来る。』五月二十四日に、私は、すでにその見解の動搖してゐるブレオブラツェンスキイに手紙を書いた。

『君のテーゼを受取つた後で、私はそれについて何人にも一語も書き送らなかつた。一昨日、私はカルパシヨヴォ發の次の電報を受取つた。「ブレオブラツェンスキイの提議と見透しを絶対に排斥する。すぐ返辭を送れ。スミルガ、アルスキイ、ネチャエフ。」昨日私はウスト・クローン發の電報を受取つた。「ブレオブラツェンスキイの提議は誤りだと考へる。ピロポロドウ、ヴァレンチノフ。」昨日私はラコウスキイから書簡を受取つたが、その中で彼は君を賞讃してをらず、スターリンの「左翼政策」即ち英語表式で「wait and see」（待望）の政策にたいする、彼の態度を表明してゐる。一昨日私は、またピロポロドウ及びヴァレンチノフから一書簡を受取つた。彼等は、ラデツクがモスコウへ送つた、いぢの悪い氣分を表した或る信書によつて、甚しく惱まされてゐる。彼等は猛り立つてゐる。ラデツクの書簡についての彼等の見解が正しいなら、私は完全に彼等と一致する。敏感性への寛容は、推獎する可きことではない。

『狩獵旅行から歸つて來てから——即ち三月の末日以來——私は家を出なかつた。私は朝の約七八時から夜の十時までづつと書物を読んでゐるか、またはペンで書きものをしてゐた。私は數日間閑暇をつくらうとしてゐる。いまは狩獵は行はれないから、ナタリヤ・イヴァノヴナとセリョーザ——彼はいまこゝにゐる——と私とは、イリ河へ魚漁旅行に行くだらう。その時には君はその報告

を受取るだらう。

『フランスの選挙にどんなことがおこつたか、君は理解することが出来たか？ 私は出来なかつた。『プラウダ』紙は、この前の選挙の時のそれと比較した、候補者総数の数字すら掲載しなかつたから、コミニユニストの比率が變化したかどうか、それを述べることは出来ない。しかし私は、外國の諸新聞紙からこれを探索するつもりだ。いづれそれを書きおくる。』

五月二十六日に、私は、デョルヂャ・ポリシエヴィキの最古參者のミハイル・オクドザヴァに手紙を書いた。

『スターリシの新しい政策がそれ自身で目標をおく限りでは、それは疑ひもなく我々の見解へ接近しようとの企てを代表してゐる。だが、政治では、ことを決定するものは、單に「何が」ではなく、「如何に」且つ「誰が」だ。革命の運命を決定す可き主要な戦闘は、まだ先だ。……

『支配的分派の側における政治的墮落は、一つの絶対に破壊されない下向線だと説明されてはならない、我々はさう考へたし、一度ならずさう述べた。要するに墮落は空虚な空間に起るのでなく、階級社會において、深い、内部的軋轢の間に起るので。黨の主要な大衆は、一箇の固い同質的團結であることから、遙かに遠いものであつて、壓倒的な度合ひにおいて、それは政治的原料たるに過ぎない。それは不可避的に分化の過程——右翼ならびに左翼の雙方からの、階級衝突の壓力の下で——に従ふものだ。君と僕の關係してゐる最近の時期の黨務上の重要な出来事は、將來の事態の進行にたいする序曲にすぎない。オペラの序曲が、オペラ全體の音樂的テーマを豫め知らせ、壓縮し

た形でそれを述べると全くおなじに、我々の政治的「序曲」も將來、喇叭、コントラ・バス、太鼓その他の重大な階級音樂の一切の樂器によつて強められて、全幅の發展をもたらす可きメロディを豫め知らせるものに過ぎない。事態の今日まで進んで來た道は何等疑ひの餘地なく、我々に次のことを確信せしめる。すなはち、我々は、氣の變り易い人間や裏切者（ジノヴィエフ一派、カメネフ一派、ペタコフ一派等）にたいしてのみならず、左翼における我々の親愛な友達にたいしても、これまで正しかつたし、いまも正しいといふことだ。——その左翼は、ウルトラ・左翼であつて、彼等が序曲をオペラと取りちがへ、黨及び國家における一切の基礎的過程は既に完成に到達したと考へ、彼等が初めて我々から聞いたテルミドールを既に完成された事實と考へる限りにおいて、頭の鈍い人達だ。神經過敏に陥つてはならない、不必要に自身や他人を惱ますな、勉強し、時期を待ち、鋭く先方を見詰め、個人的焦燥の鏽によつて、我々の政治的方法を腐蝕させてはならない——これが我々の態度でなければならぬ。』

六月九日に、私の娘で、私の熱烈な支持者のニナが、モスコウで死んだ。彼女は二十六であつた。彼女の夫は私の流刑になる少し前に逮捕された。彼女は病氣にかゝつて——急性肺病で數週間のうち彼女を奪つてしまつた——床につくまで、反對派の仕事をつゞけた。病院から私に書いてよこした彼女の手紙は、七十三日目に、彼女の死んだ後に、私のところへ到着した。

ラコウスキイは、六月十六日に打電し、『昨日、ニナの重態についての君の手紙を受取つた。モスコウに在るアレキサンドラ・ゲオルギエウナ（ラコウスキイの妻）に打電した。ニナの短い革

命的な生活の終つたことを今日新聞で知つた。親愛な友よ、僕は徹頭徹尾、君と一緒に。かくも越ゆるべからざる距離で君と分たれてゐることは、僕を悩ましてゐる。心の底から幾度も君を抱擁する。クリスチャン。』と言つてゐた。

二週間後に、ラコウスキイの書簡が来た。

『親愛な友よ、僕は、君及び君一家のために、ニコチカのことについて非常に悲しんでゐる。君はこれまで長い間、一個の革命的マルクシストの重い十字架を背負つて来たが、こんどは初めて君は、一個の父としての無限の悲しみを經驗してゐる。僕は、心の底から、君と一體だ。僕は君からかくも離れてゐることを悲しんでゐる。……君は、モスコウで君は無茶な取扱ひをした後で、君の友達に加へられた馬鹿馬鹿しい手段について、セリョーザから聞いたに相違ない。僕は、君が出發して一時間後に君の家へ行つた。多くは婦人の一團の同志と、ムラロフとが客間にゐた。

『市民ラコウスキイとはどいつだ？』僕はかう云ふ聲を聞いた。

『僕だ、何の用があるのか？』

『一緒に来い。』

『僕は廣間を通つて、小さな部屋に導かれた。その部屋の戸のところ、僕は、「手を擧げろ。」と命ぜられた。それから僕のポケットが搜索され、僕は檢束された。五時に釋放された。その後僕と同じ目に遭つたムラロフは、その夜遅くまで抑留されてゐた。……僕は、僕自身の同志達のために忿怒を感じるよりも、寧ろ氣はづかしさを感じて、「彼等の頭を打ち落せ」と自身に言つた。』

七月十四日に私はラコウスキイに書いた。

『親愛なクリスチャン・ゲオルグエウイツチ、私は、君にも、他の友達にも、ずいぶん長い間、手紙をかゝなかつた。私は、さまざまの材料を送り出すことに没頭してゐたのだ。私がイリ河——そこで初めて私はニナの重態の報知を受取つた——から歸つて後、我々はすぐに田舎家へ引越した。數日後、そこへ彼女の死の通知が来た。それが何を意味してゐるか、君はよく知つてゐる。……だが、時間を空費しないで、コンミニュニスト・インターナショナル第六回大會のために、文書を整へる必要があつた。困難な仕事だつた。一方、どんな犠牲を拂つてもこの仕事を完成しなければならぬといふ必要は、芥子泥のやうな作用を持ち、私を援けて、最初の最も困難な數週間を堪へ忍ばせた。』

『我々はこゝで七月中、ゼニユシヤ（姉嬢）を待つてゐた。あゝ！我々はこの訪問を拒まれざるを得なかつた。ゲエチエールは、彼女を即時に肺病の療養院に入れなければならんと要求したのだ。彼女は久しい以前から、その病菌をもつてゐたのだ。そして醫師達が既に彼女を見限つた後で、三箇月間、ニヌシヤを看護したことが、彼女の健康を非常にそこなつたのだ。……』

『こんどは大會のための仕事だ。私は、我々が公式指導者に反對してゐる一切の問題と結びつけて、綱領草案の批評に着手しようと思つた。私は、その結果、約百七十頁の一書を生み出して、この仕事を終つた。一般的に言へば、私は、この五箇年間、即ちレーニンが黨の指導から引退し、向う見ずの亞流共がやつて来て、第一には舊資本の利子で生活してゐたが、やがて資本そのものを』

喰ひ始めた時期中の、我々の集合作業の結果を總決算したのだ。

『大會へのアツピールに關して、私は、數十通の手紙と電報を受取つた。投票の整理はまだすつかりやつてない。が、とにかく百票のうちからブレオブラツエンスキイのテーゼに賛成のものは、三票しかない。』

『スターリンのブハーリン及びリユーコフとのブロックが、我々に最後決定的の墓石をかぶせようとの最後の望みのない企てとして、この大會において統一の外観を保つてあらうことは、甚だ在り得べきことだ。しかし正にこの新しい努力と、その不可避の結果とは、そのブロック内の意見の相違の進行を大いに促進するであらう、といふのは、大會のすんだ後で、「次には何を？」といふ問題が、これまでよりも一層ひどく露骨に持上つて来るだらうから。それにどういふ答へが與へられるだらうか？ 一九二三年のドイツにおける革命的状态を取逃してしまつた後で、我々は一九二四——五年の間の極左的ジクザクで應報された。ジノヴィエフの極左政策は右翼的酵母——工業主義者にたいする闘争、ラチツシエ、ラ・フォレット、クレスチン黨、國民黨とのローマンズ——から生れたものだ。極左的政策が頭を割つた時に、右翼政策が同じ右翼的酵母から生れた。或る新しい段階で、これが一層廣汎に繰返される機會は防止されない、即ち同じ反對派の前提の上に基礎をおいた新しい極左相がやつて来る。だが、眼に見えない經濟諸力は、この極左的傾向を打ち碎いてしまつて、政策を決定的に右翼の方へ歪曲げるであらう。』

八月に私は、多くの同志達に書いた。

『もちろん諸君が注意してゐるやうに、我々の新聞紙は、我々の黨内に起つた出來事についての、アメリカ及びイギリス新聞紙の言説を、絶対に再録してゐない。このことだけでも、人をして、それらの言説が「新政策」の諸要求に全く沿はないのだらう、との疑念を起させるに足るものだ。いま私は、單なる示唆でなく、新聞紙からの極めて驚目的な實證の斷片である或るものを持つてゐる。同志アンドレーチンが、アメリカの『ネーション』の二月號から、一頁を引裂いて送つてくれたのだ。この重要な右翼民主主義雜誌は、我々の最近の出來を簡單に總括した後で言つてゐる。『この行動は次の問題を前面に押出して來てゐる。即ち、ロシアにおけるポリシエヴィキ綱領の繼續を代表するものは誰であるか、及び、それからの不可避的の反動は誰であるか？ である。アメリカの讀者にとつては、これまでレーニンとトロツキイとは同一のものを代表したかのやうに考へられて來てをり、保守的新聞紙及び諸政治家もそれと同様の結論に到達してゐた。かくて『ニューヨーク・タイムズ』紙は、共産黨がトロツキイ除名に成功したことのうちに、新年をことほぐ主要な原因を見出し、『この逐ひ出された反對派は、ロシアを西歐文明から切離すところの觀念と條件の恒久化を主張したのだ。』ときつぱりと宣告してゐる。ヨーロッパの大新聞紙の多くも、同一のことを書いてゐる。サー・オーステン・チャンパーレンは、ゼネバ會議中に次のやうに言つたと記録されてゐる。イギリスがロシアと商議を開始することの出來ない理由は簡單で、『トロツキイがまだ射殺されてゐない』からだ——彼はトロツキイが消えたことで、悦ばされたに相違ない。……とにかく、ヨーロッパの反動の代辯者達は、コンミニニストの中での彼等の主要な敵はトロツ

キイであつて、スターリンでないといふ彼等の結論において一致してゐるのだ。」これがまことに雄辯に物語つてゐるではないか？」

こゝに私の息子のノートからの統計の断片がある。一九二八年の四月から十月まで、我々は、アルマ・アタから約八百通の書簡を送り出したが、その中に若干の大きな労作がある。我々は、多くの場合人々の諸グループから長短約一千通の政治的書簡と、約七百通の電報とを受取つた。この凡ては主として、流刑地域との文通に關するもので、流刑者からの手紙は、同じく國內へ廻された。我々に宛てた手紙で、我々の受取つたものは、いゝ月で、その半分でしかなかつた。その外、我々は、モスコウから約八通乃至九通の秘密郵便物を受取つたが、これらは特別の使によつて運ばれた資料や手紙であつた。ほとんどもそれと同数の郵便物が、同じ方法でモスコウへ送られた。その秘密郵便物は、モスコウで行はれてゐる凡てのことを我々に知らせしてくれ、非常におくれてからであつたが、最も重要な出来事に我々の批評を加へさせてくれた。

秋に向つて、私の健康状態は非常に悪化した。この評判がモスコウに到着した。労働者達は諸集會でこの問題を持ち出した。公式の通報員等は、私の健康を非常に立派なものに描き出すことが、彼等の最善のやり方だといふことを發見した。十一月二十日に私の妻は、モスコウの黨組織の當時の書記ウグラノフに次のやうな電報を送つた。

『貴下はモスコウ委員會の準備會議の席上の演説で、私の夫エル・デイ・トロツキイの病氣は虚構だと述べた。多くの同志達の心配と抗議に言及して、貴下は「これが彼等の頼る手段だ。」と憎惡的

に叫んだ。貴下は、レーニンの共力者等を逐出し、彼等を病氣だと宣告してゐる人々にとつては不似合でないが、それに反抗してゐる人々にとつては不似合な手段が講ぜられてゐるといふことを、明かにしたのだ。貴下は、どういふ根據があり、どういふ権利があつて、黨、労働者及び全世界に向つて、エル・デイの病氣の報道は嘘だと報道したのか？ 貴下は實際、黨を欺いてゐる。中央委員會の文書には、エル・デイの健康状態にたいする、我々の最も優れた醫師の報告が納められてゐる。それらの醫師達の診察は、エル・デイの健康に最大の關心を持つてゐたウラヂミル・イリイチの發議で、一度ならず行はれたものだ。ウラヂミル・イリイチの死後に求めた診察によつて、エル・デイは物質の間違った同化作用のために、大腸炎と痛風に悩んでゐるといふ事實が、確定された。一九二六年、エル・デイは、高熱を除くためにベルリンで手術をうけたが、そのために何等よくならなかつたことを多分貴下は御存じだらう。大腸炎と痛風とは、全治され得ない種類の病気で、特にアルマ・アタではさうである。年が経つにつれて、悪くなつて行く。健康は、適當な養生と、正しい手當によつて、始めて一定の水準でこれを維持することが出来るのだ。アルマ・アタでは、その何れも求めることが出来ない。養生と手當が必要だといふことについては、ウラヂミル・イリイチの言附で行はれた診察に、幾度も立合つた保健人民委員のセマシヨに聞いて見るがよい。その上、エル・デイはこゝでマラリヤの犠牲となつてをり、それがまた大腸炎にも、痛風にも影響し、屢々よくない頭痛を惹起してゐる。彼の状態が良好な數週間、數箇月の後には、更に、重い病氣の數週間、數箇月がつゞいて来る。これが實際の事情だ。貴下は、第五十八條によつて、エ

ル・デイを「反革命家」として流刑に處した。貴下がエル・デイの健康に全く貴下に關係のないことだと云つたとしても、それは合點の行くことだ、その場合、貴下は首尾一貫してゐる譯で、それこそ、もしそれが停止されなければ、最良の革命家ばかりでなく必ずや黨及び革命そのものをも墓場へ導くべきかの危険な首尾一貫性だ。しかし今は、明かに、労働者の輿論の壓力によつて、貴下は首尾一貫して行く勇氣を缺いてゐる。そこで貴下は、トロツキイの病氣は、彼の思考と述作を妨げ得るが故に、貴下にとつて利益だと言ふ代りに、あつさりとその病氣を否定してゐるのだ。カリーニン、モロトフ及びその他も、彼等の公然の言説において、貴下と同様なことを言つてゐる。貴下が大眾からの質問に答へざるを得なくなり、そんな見つともない仕方で蠕動せざるを得なくなつたといふ事實は、労働階級がトロツキイに關する政治的誹謗を信じてゐない證據である。労働階級はまた、エル・デイの健康状態に關する貴下の虚言も信じないであらう。

エヌ・アイ・セドーヴァ・トロツキイ』

第十二章 國外追放

十月に、我々の状態に激しい變化が起つた。我々の個人的及び政治的の友達との通信、モスコウの我々の縁者とのそれすらが、突然止まつた。手紙や電報はもはや我々のところへ到着しなかつた。我々が特別の筋から知つたところによると、モスコウの電信局は、私に宛てた數百通の電報、特に十月革命の記念日に關する電報を差押へたのだ。我々をめぐる環は、層一層と引締められてゐた。

一九二八年中に、反對派は、無拘束的の迫害にも拘らず、明かに勢力を増して行き、特に大工場においてさうであつた。これが、流刑者自身間の通信すら完全に抑壓することを始めとして、諸々の報復の増加した所以だ。我々はこの次に他の何等かの種類の手段がやつて來ることを豫期した。我々は誤らなかつた。

十二月十六日に、ゲー・ベー・ウーの特別代表がモスコウから來て、その官廳の名において、私に最後通牒を手交した。私は反對派を指導することを止めなければならぬ、もし止めないならば、『私を政治生活から孤立させる』手段が講ぜられるであらう、といふのだ。だが、私を國外へ追放するといふ問題は、その時はまだ起つて居らず、考究中の手段は、私の理解した限りでは、單に内國的の性質を帯びたものに過ぎなかつた。私は、黨の中央委員會及びコミニニスト・インテリナショナルのプレシヂエムへ宛てた書簡をもつて、この最後通牒に答へた。

私は、こゝに、この書簡の主要點を引用しておくことが必要だと思ふ。

本日、即ち十二月十六日、ゲー・ベー・ウーの委員會の代表者ヴォリンスキイは、同委員會の名をもつて、口頭で、私に次の最後通牒を言ひ渡した。

『全國を通じての貴下の政治的同感者の活動は、(殆ど言葉通りに引用する。)最近、はつきりした革命的性質を帯びて來てゐる。貴下がアルマ・アタにおかれてゐる事情は、貴下にこの活動を指導する完全な機會を提供してゐる。これに鑑みて、ゲー・ペー・ウーの委員會は、貴下に、貴下の目下の活動を中止するといふ無條件的の約束を要求することに決定した。もしこれに従はない場合には、委員會は、貴下を政治生活から完全に隔離する程度まで、貴下の生存條件を變更せざるを得ないであらう。これに關聯して、貴下の住居地變更の問題が惹起されるであらう。』

私はゲー・ペー・ウーの代表者に向つて、ゲー・ペー・ウーの最後通牒を文書にして彼から受取れば、その時初めて私は文書をもつて彼に答へると述べた。私が口頭をもつてする答へを一切拒絶したのは、過去の一切の私の經驗から考へて、私の言葉がソヴェット・ロシア及び爾餘の世界の大衆を誤導するために、ふたゝび惡意をもつて歪曲されるだらうとの確信に基いたものであつた。

しかし乍ら、ゲー・ペー・ウーの委員會——この場合、それは何等獨立の役割を演じてゐるのでなく、スターリンの狭い分派の、久しい以前から私によく知られてゐる舊い決定を、機械的に執行してゐるのに過ぎない——の今後の行動に關係なく、私は、次のことに關して、全露共産黨中央委員會及びコミニスト・インターナショナル執行委員會の注意を求めておくことが必要だと考へる。

私に政治的活動から退けとの要求は、私に國際プロレタリアートの利益のための闘争、私の全意識生活をを通じて、過去三十二年の間、引續き私の行つてゐた闘争を廢棄せよとの要求である。この活動を『反革命的』と説明しようとの企ては、私がマルクス及びレーニンの教義の根本原則を侵害し、世界革命の歴史的利益を傷け、十月革命の傳統と觀念を廢棄し、無意識的ではあるが一層威嚇的に、テルミドルを準備しつゝあるものとして、萬國のプロレタリアートの面前で攻撃してゐる、その人々から爲されてゐるものである。

政治的活動から身を退くことは、共産黨の現在の指導の盲目性にたいする闘争をやめることに等しいであらう——その盲目性は、社會主義的建設事業の客觀的の諸困難に加ふるに、廣汎な、歴史的規模においてプロレタリア政策を手配する能力のないその日和見主義者によつて齎された常に増加して止まない政治的困難をもつてしてゐるのである。

それは、プロレタリア前衛にたいする敵の諸階級からの増大する壓迫を反映してゐるところの、黨統治の絞殺にたいして、闘争することを止めるに等しいであらう。それは、プロレタリアートの獨裁の基礎を覆へし、動搖させてをり、その物質的・文化的進歩を遅らせてをり、同時に勞働者及び勞苦農民の同盟——ソヴェット政權の基礎——に手痛い打撃を與へてをるところの、日和見主義の經濟政策の前に、消極的に服従するに等しいであらう。

黨のレーニンの一翼は、一九二三年以來、即ちドイツ革命の空前の崩壞の時以來、つねに打撃の雨の下におかれて來てゐる。これらの打撃の増大する力は、日和見主義的指導の結果として、萬國及びソヴェットのプロレタリアートの更に進んでの敗北と歩調を合せてゐる。

理論的推理及び政治的經驗は、歴史的後退又は反動の一時代が、ブルジョア革命ばかりでなく、同様にプロレタリア革命にもついで起り得ることを證明してゐる。六箇年の間、我々は、『十月』にたいする増大する反動の條件の下に、及びその結果、テルミドールへの道の清掃の條件の下に、ソヴィエツト聯邦社會主義共和國に生活して來てゐる。黨内におけるこの反動の最も顯著な、完全な表現は、黨組織の左翼にたいする野蠻な迫害と放逐である。

徹底的テルミドールヤン（極反動乃至極溫和主義者のこと——譯者）にたいする抵抗のその最近の企てにおいて、スターリン分派は、反對派の觀念の斷片や切れつ端しの上に生活してゐる。創造的には、その分派は無力である。左翼にたいする鬭争は、その分派から安定性を奪つてゐる。その實際的政策は、虚偽な、矛盾した、信賴すべからざるものであつて、何等支柱をもつてゐない。右翼からの危険にたいする、喧しい反對運動は、その四分の三は嘘であつて、何よりも第一に、ポリシエヴィキ・レーニン主義者にたいする眞の絶滅の戰爭を、大衆の眼から蔽ふに役立つてゐる。

明かに權力を握つてゐるに拘らず、機關を首班とする反動の薄弱性の癒す可からざる所以は、『彼等が何を爲すべきかを知らない。』といふ事實のうちにある。彼等は敵の諸階級の命令を遂行してゐる。革命の中から生れ出で、いまではそれを覆へしつゝある一分派にたいして、これ以上大きな歴史的呪詛はあり得ない。

一見薄弱に見えるに拘らず、反對派に最大の歴史的勢力のある所以は、それが世界の歴史的過程の衝動の上に手をおいてゐるといふ事實にあり、それが階級勢力の力學を明瞭に知つてをり、來る

可き日を見透してをり、且つ意識してそのために具へてゐるといふ事實にあるのである。政治的活動から身を退くことは、明日のために準備することから身を退くに等しいであらう。

私の生存條件を變更し、政治的活動から私を切離すとの威嚇は、恰も私が、モスコウを去ること四千キロメートル、鐵道を去ること二百五十キロメートル、支那の西部沙漠地方を去ること約同距離の地點——恐しいマラリヤと、癩病と、惡疫の支配してゐる地域へ、既に放逐されてゐないものであるかのやうに、聞える。それは、恰もスターリンの分派——その直接の機關がゲー・ペー・ウーだ——が、政治的生活ならびに一切の生活から私を切離すために、その爲し得る一切のことを、かつてやつてゐなかつたものでもあつたかのやうに、聞える。モスコウの新聞紙がこゝへ到着するのは、十日乃至一箇月或はそれ以上もかゝる。書簡は、若干の例外はあるが、ゲー・ペー・ウー及び中央委員書記の綴込みのうちに、一二箇月乃至三箇月とゞめおかれた後で、初めて私のところへやつて來るのである。

内亂の時私の最も親しい共同者であつた中の二人で、危険を冒して自發的に流刑地へ私について來ようとした同志セルムクスとボズナンスキイは、到着するとすぐに逮捕され、罪人と一緒に地下室に監禁され、それから北方地方の遠隔の地に流刑に處せられた。致命的な病患にかされてゐた私の娘——諸君が黨から除名し、その職を奪つた——からの手紙は、モスコウの病院から發せられて七十三日目に私に到着したので、私が返辭を書いた時には、既に彼女はこの世にゐなかつた。私のもう一人の娘——彼女も亦諸君によつて黨から除名され、その職を奪はれた——の由々しい病氣

についての手紙は、一箇月以前即ちモスコウを離れてから四十三日目に私に配達された。私の健康を問合はせて来る電報は、多くの場合、決してその宛名人には到着しないのである。

十月革命と萬國のプロレタリアートにたいする奉仕においては、彼等を投獄し、放逐した人々の奉仕より遙かに優つてゐる數千の何等非難すべき點のないポリシエヴィキ・レーニン主義者は、それと同一の状態か、若くは一層悪い状態におかれてゐる。

反對派にたいして益々増大する報復を企てながら、スターリン——これらの特性が現在の百分の一の程度にすら露呈されてゐなかつた時、レーニンが彼の「遺書」において、『粗野で不忠誠』だと呼んだ人間——の狭い分派は、ゲー・ペー・ウーの助けをかつて、反對派の間に、プロレタリア獨裁のこの敵との或る『連絡』を打ち樹てようと、絶えず努力してゐる。彼等の小さなサークルの内部において、現在の指導者は、『これは大衆にとつて必要だ。』と云ひ、時としてはもつと狡猾に、『これは馬鹿者のためだ。』とすら云つてゐる。私の最も親密な共働者で、内亂の全數年間、共和國の革命軍事會議の書記の任にあつたゲオルギイ・ヴァシリエウイチ・ブトフは、逮捕されて、堪へ難い境遇におかれた。この純粹な、溫和しい人間、この非難の打ちどころのない黨の働き手から、彼等は暴力によつて、テルミドリーヤンの製造に成る告訴、豫め虚偽であり、贗造であることの知られてゐる告訴の證言を強請らうと努力した。それにたいするブトフの答へは、五十日間の英雄的な飢餓ストライキであつた、そして今年の九月に彼は牢獄で死んだのである。暴行、虐待、迫害——肉體的及び精神的の——が『十月』の觀念を確守してゐるがために、最善のポリシエヴィキ

勞働者に向つて加へられてゐる。かくの如きものが、ゲー・ペー・ウーの委員會の言葉をかりれば、一般に反對派、特殊に私の政治的活動に現在『何等の障礙も呈してゐない』ところの、一般的境遇なのである。

私のためにかゝる境遇を變更して、更に一層孤立の方向に向はせるとの淺ましい威嚇は、流刑に代ふるに投獄をもつてしようとのスターリン分派の決定以外の何ものでもないのである。この決定は、私のすでに上に述べたやうに、何等驚愕すべきことではない。早くすでに一九二四年に、それは豫想的に形成され、その後徐々に歩一歩と遂行されて來てゐるので、抑壓され、欺かれた黨は、知らず知らずのうちにスターリンの——彼の粗野と不忠誠とは、いまや有害な、官僚的不忠誠にまで成熟した——の方法に慣らされて來たのである。

第六回大會へ提出した『宣言』——恰も今日私に提示された最後通牒を豫見したかのやうな——において、私は次の言葉のまゝを書いた。『革命家にそのやうな抛棄（政治的活動、即ち黨及び國際的革命的任務の）を要求することは、完全に墮落した官吏社會にとつてのみ可能であらう。侮辱すべき墮落漢だけが、さういふ約束を與へることが出来るであらう。』

私はこれらの言葉の何ものも變へることは出来ない。……各人には、彼の爲すべきことがある。諸君は、プロレタリアートに敵意のある階級勢力によつて鼓舞された政策を、遂行しつゞけようとして欲してゐる。我々は我々の義務を知つてをり、我々は最後までそれを遂行するであらう——。

一九二八年十二月十六日、アルマ・アタで

この回答の後、一箇月は何事もなく過ぎた。我々と外界との連絡は、モスコウとの秘密連絡を始めとして、完全に断ち切られてしまった。一月中、我々はモスコウの諸新聞紙を受取つたに過ぎない。諸新聞紙が右翼にたいする闘争について書けば書くほど、我々は、それに應じてますます確信的に、左翼にたいする弾壓を待つた。それがスターリンの遣り方だ。

モスコウから来たゲー・ペー・ウーの使者ヴォリンスキイは、アルマ・アタにとどまつて、訓示を待つてゐた。一月二十日、彼は、ゲー・ペー・ウーの多くの武装した役人——彼等は私の家の入口と出口を占領した——を引きつれて、私の家に現れ、一九二九年一月八日のゲー・ペー・ウーの議事録からの、次の拔萃を私に手交した。

『審議事項、非合法的反ソヴェット徒黨の組織において反革命的活動をなし、最近その活動を反ソヴェット行動の挑發に向け、ソヴェット權力にたいして武装的闘争を行はんと準備した廉によつて、刑法五十八條第十項の罪に問はれてゐる市民レウ・ダヴィドヴィツチ・トロツキイの事件。決定。市民トロツキイ、レウ・ダヴィドヴィツチは、これを社會主義聯邦ソヴェット共和国から放逐するものとす。』

それから私は、私がこの決定を知つたといふことを證明するために、紙片に署名を求められた時、次のやうに書いた。『本質において犯罪的であり、形式において反合法的な、ゲー・ペー・ウー

の決定が、私に通告された。一九二九年一月二十日、トロツキイ。』

私がこの決定を犯罪的と呼んだ所以は、それが故意に嘘をついて、ソヴェット權力にたいして武装的闘争の準備をしてゐるといつて、私を斷罪してゐるからだ。スターリンにとつてこの追放を正當化するために必要なこの表式は、それ自身において、ソヴェット權力を顛覆せんとする最も有害な企圖だ。十月革命の組織者等、ソヴェット共和国及び赤軍の建設者等によつて指導される反對派が武器の力によつてソヴェット權力を顛覆しようとする準備しつゝあつたといふことが、もし本當であるとすれば、このこと自身が、この國にとつて呪はれた破局であらう。幸にして、ゲー・ペー・ウーの表式は、横柄な嘘である。反對派の政策は、武装的闘争の準備とは、何等關係のないものだ。我々は徹頭徹尾、ソヴェット統治の深甚な生命力と弾力性の確信によつて、導かれてゐる。我々の目的は内部改革だ。

如何にして、何處へ私は追放されるのかと訊ねた時、私は、ヨーロッパ・ロシアにおいて、そこで私に會ふ筈になつてゐるゲー・ペー・ウーの代表者から通告があるだらう、との返答を受取つた。翌日はまる一日、原稿や書物をほとんど取除いて、あとのものゝ熱病的な荷作りに費された。序でに言つておくが、ゲー・ペー・ウーのその役人達の側には敵意の影さへなかつた。全くその反對だつた。

二十二日の夜明けに、私の妻と、私の息子と、私は、護送隊と共に、乗合自動車で出發し、その車は滑かな、しつかりした雪の道に沿つて、我々をカーデー山脈の頂上まで運んだ。山頂には、ひ

どい吹雪と、強風とがあつた。カーデー通路まで我々を引張つて行く筈の索引車は、その引張つてゐる七臺の自動車と一緒に、すつぽりと雪に埋れてゐた。雪嵐の間に、七人の人間と、澤山の馬匹とが、通路で凍死してゐた。我々は橋に移らざるを得なかつた。約三十キロメートルを前進するのに、七時間以上かゝつた。橋道に沿つて、我々は、その輓が凍りついてゐる澤山の橋、建設中のトルケスタン・シベリヤ鐵道の多くの材料、多くの燈用石油タンクに出會つた——みんな深く雪に埋れてゐた。人間達や馬匹が、キルギス人の冬のキャンプの中で、雪嵐を避けてゐるのが見られた。

山脈の向う側では、再び自動車、それからビスペックで、鐵道列車。途中で手に入れたモスコウの諸新聞紙は、反對派の諸指導者を諸外國へ追放することについて、輿論が準備されてゐることを示してゐた。アクチュビンスク地方で、我々は、追放地はコンスタンチノープルとなつてゐるとの、直接線で傳達された通報に接した。私は、モスコウの私の家族の二人の者、私の次男と、私の嫁とに會ひ度いと要求する。彼等は、リナズク停車場に連れて來られ、我々と同じ支配のもとにおかれる。ゲー・ペー・ウーの新しい代表のブラノフは、コンスタンチノープルの有利な諸點を私に信じさせようと骨折つてゐる。私は、それらを利用することを、無條件的に拒む。ブラノフは、モスコウと直通線で協議に耽つてゐる。そこでは、自發的に外國へ赴くことにたいする私の拒絶を除いては、凡てのことが見透されてゐた。

我々の列車は、これまでとつて來た方向から轉廻して、靜かに動き、支線の可愛らしい小さな停車場で止まり、そこで薄い二列の森の間で、昏睡に沈む。一日一日と日が経つて行く。列車のまはりには空罐の數が、確實に多くなつて行く。饗宴をやり集まつて來る鴉や鵲の群は、ます／＼ふえるばかりだ。荒野……寂寥……こゝには野兎は一羽もゐない、残酷な悪疫のために、秋、絶滅されてしまつたのだ。そこで狐は、この列車のところまで彼の盗むやうな足跡をつけてゐる。機關車は、我々の晝食と、我々の新聞紙をもつて來るために、一輛の車を引張つて、毎日毎日大きな停車場へ小旅行する。感冒が我々の車内に流行する。我々は、アナトール・フランスと、クリエチエウスキイのロシア史を繰返し讀む。私は初めてイストラチと知合ひになる。寒氣は、零下五十三度（華氏）に下る。我々の機關車は、凍りつかない用心に、レールの上をたえず行つたり來たりしてゐる。大氣の中では、ラヂオが我々のゐるところを訊ねて、お互ひに呼び出してゐる。我々はそれらの質問を聞くことは出來ない。我々は將棋をやつて遊んでゐる。だが、たとひ我々がそれらの質問を聞いたとしても、それに答へることは出來ない。我々は夜こゝへ連れて來られたのだ。我々自身、我々が何處にゐるのか知らないのだ。

こんな工合にして、我々は十二日と十二夜を費した。我々は、謂ゆる『トロツキイ主義者の中心』たる百五十名をふくめて、數百名の人々が新たに逮捕されたことを、新聞紙から知つた。發表された名前のうちには、ヂョルヂヤの人民委員ソツイエツトの前議長カヴタラツ、在パリ前ソツイエツト・ロシア通商代表マデイヴァニ、及び我々の最も優れた文學批評家ヴォロンスキイ、その他

——すべて古い黨員、十月革命の指導者がふくまれてゐた。

二月八日に、ブランフは通告した。『モスコウからのあらゆる努力にも拘らず、ドイツ政府は、貴下をドイツへ入れることを無條件的に拒絶しました。私は、貴下をコンスタンチノーブルへ送りとどけるやうにとの、最後の訓令を與へられました。』

『しかし私は自發的には行かないつもりだ。私は、トルコ國境でさう言明するつもりだ。』

『さうしても別に事態に變りはないでせう。どちらにしても貴下は、トルコへ送りとどけられるでせう。』

『では君は、私を強制的にトルコへ追放するために、トルコの警察と取引をしたのだな？』

逃げを打つやうな身振り。『我々は我々に與へられた命令を遂行するだけです。』

十二日間停車してゐた後で、列車は動き始めた。我々の小さな列車は、我々の護送隊で一杯になつた。ビスベックで汽車に飛込んで以來、この旅行を通じて、我々は客室を離れることを許されなかつた。いま我々は、全速力をもつて南方へ走つてをり、たゞ水と燃料を積込むために、小さな停車場で停車するに過ぎない。かういふ極端な警戒振りは、一九二八年一月、私の流刑に關聯したモスコウの示威運動の記憶に基くものだ。途中で受取つた諸新聞紙は、トロツキイ主義者にたいする新たな大きな反對運動の反響を、我々に齎した。私の追放問題について、上層グループの間に闘争の起つてゐることが文字の間にあり／＼と見えてゐた。スターリン分派はせき込んでゐた。これには十分な理由があつたので、彼等は、政治的障害ばかりでなく、物理的障害にも打勝なければなら

なかつたのだ。曩に汽船カリニン號が、オデッサから我々をつみ込むやうに命ぜられたが、船體が氷で閉ぢ込められてゐて、碎氷船の一切の努力も無駄だつたのだ。モスコウは電報を打ちつけて急ぎ立てゝゐた。汽船イリイツチ號が、至急命令によつて發動した。我々の列車は、二月十日の夜、オデッサに到着した。私は、車窓からよく知つてゐる箇所を眺めた、私の學生々活の七年を私はこの都市で暮したので。我々の客車は眞直ぐにその汽船まで運ばれた。厳しい寒さであつた。時間が遅かつたにも拘らず、埠頭は軍隊と、ゲー・ペー・ウーの役人で取圍まれた。こゝで私は、この二週間、我々と禁錮の苦しみを分つた私の次男と、その嫁とに、別れを告げなければならなかつた。車窓を通して、我々を待つてゐる汽船を窺き見ながら、私は、曩にやはりいまと同じに、我々の本来の目的地に我々を運んでくれなかつた他の汽船のことを想ひ出した。それは一九一七年三月、ハリファックス沖の出來事で、その時イギリスの汽船が、乗客の群衆する面前で、ノルエーの汽船クリスチャニアフヨールド號から、私を引取つて、その甲板に乗せて運び去つたのだ。我々の家族はその時と同じであつたが、しかし我々はいまより十二年若かつた。

貨物もなければ乗客もないイリイツチ號は、朝の一時頃に錨をぬいた。六十哩の間、一碎氷船が我々のために通路をこしらへた。吹き荒んでゐた強風は、こゝで、我々にその羽翼の最後の強打を與へた。二月十二日に、我々はボスポロスに入つた。乗客——私の家族と、ゲー・ペー・ウーの役人の外には、船中に一人の乗客もなかつた——を取調べるために、ビュエデーレでこの船に乗込んで來たトルコ警官に、私は、トルコ共和國大統領ケマル・パシヤに宛てた次の説明書を手交した。

「閣下、コンスタンチノーブルの入口において、私は、閣下に次のことをお傳へする名譽を擔ふ。即ち、私のトルコ國境に到着したのは、私自身の發意からではないこと、及び私は暴力に服従することによつてのみ、この國境を通過するものであること、是である。大統領閣下、私の切なる感情を受取られんことを請ふ。一九二九年二月十二日、エル・トロツキイ。」

この宣言は何等の結果も齎らさなかつた。汽船は港内へ進んだ。その距離六千キロメートルに亙つた、二十二日間の旅行の後、我々はコンスタンチノーブルにゐる我々を見出したのだ。

第十三章 査證のない地球

我々は、コンスタンチノーブルにやつて来て、最初は領事館の建物にをり、次には個人のアパートメントへ移つた。こゝに、最初の時期を取扱つた私の妻のノートから若干行を引用する。

『コンスタンチノーブルへ落付くことに關聯した小さな冒険——小さな欺瞞と強制——は、おそろくそれについて述べる價值はないであらう。たゞ私は、一つの挿話を記しておかう。私達はまだ、オデッサへ赴く途中の列車のなかにゐた。ゲー・ペー・ウーの代表ブラノフは、外國での我々の安全に關する、あらゆる種類の絶対に無價値な考慮をしやべつてゐた。その時エル・デイは彼を遮つて言つた。「君は、私の共働者セルムクスとボズナンスキイを私と一緒に來させた方がよかつた——

それが、君のす可き唯一の有効なことだらう。」ブラノフはすぐにこの言葉をモスコウへ傳達した。次の停車場の一つで、彼は勝ち誇つたやうに、直通線で受取つた回答を私達のところへ持つて來た。ゲー・ペー・ウー、即ちポリトビユーローがそれを承諾したといふのだ。エル・デイが嘖き出した。「君は結局、我々を欺くだらう。」ブラノフは、明かに心から侮辱を感じて、叫んだ。「そんなことがあつたら、私を惡漢と呼んでもいいです。」

「何で僕は君を侮辱する必要があるかね？」とエル・デイが答へた。「その欺瞞をやるのは、君ではなくて、スターリンだよ。」コンスタンチノーブルへ着くと、エル・デイはセルムクス及びボズナンスキイのことを訊ねた。數日後、領事館の代表者は、モスコウから電報で來た返事を私達に持つて來た。彼等は釋放されないといふのだ。爾餘の私達の經驗は、大部分、これと同種類のものであつた。」

我々がコンスタンチノーブルに到達するや否や、風説、想像及び單なる虚構の無際限の流れが、新聞紙を通じて、我々の上に注がれた。新聞はその報道において、どんな缺陷も我慢が出来ず、素晴しく活動する。一つの種子を生長させるために、自然は無數の種子を風に向つて投げなければならぬ。新聞もこれと同じ仕方で仕事をやる。それは風説を拾ひ上げて、それを無限にふやして、まき散らす。正しい見解が根を下す以前に、數百數千の報道が死んでしまふ。時としては、それが（正しい見解が根を下すこと——譯者）數年後まで、起つて來ないことがある。また時としては、眞理の顯れる時が決して來ないこともある。

輿論が深く動かされた場合、人をして愕然たらしめるものは、人間の嘘をつく能力だ。私は何等道徳的嫌悪でこれを言ふのでなく、寧ろ、單に事實を述べる自然科学者の態度で、これを云ふのだ。嘘をつく衝動、及びその習慣は、我々の生命のなかの矛盾を反映してゐる。新聞紙は、例外としてしか眞實を語らない、と言つてもいふだらう。かう言ふのは、何も私が、新聞記者を攻撃し度いからではない。彼等は、他の人々のメガホンの役をつとめてゐるに過ぎないので、他の人達から非常に異つてゐるからではない。

ゾラは、フランスの財政新聞について、これを二つのグループ、即ち一つは萬事金錢づくのグループと、他は、例外的の場合にだけ、非常に高い價格で身賣りする謂ゆる『清廉』のグループとに分類することが出来ると云つた。一般に新聞紙の捏造についても、ほどこの種のことが云ひ得られよう。黄色紙は、躊躇もしなければ、尻ごみもしないで、當り前のこととして嘘をつく。ところが『タイムス』とか『ル・タン』とか云つた新聞紙は、重大でない大した結果の伴はない場合には、いつも眞實を語る、だから必要な場合には、萬幅の權威をもつて、公衆を欺くことが出来るのだ。『タイムス』はその後、私がコンスタンチノープルへ來たのは、スターリンと打合せた上のことだ、近東諸國を軍事的に征服する準備のためだとの報道を公にした。私と亞流共との間の六箇年の闘争があらかじめ配役された喜劇だと、説明されたのだ。『誰がそんなことを信ずるものか?』と樂天家は言ふだらう。ところが彼は間違つてゐる——多くの人々はそれを信ずるだらう。チャーチルはおそらく彼の新聞紙を信じないだらうが、クラインズがそれを信ずること、少くともその半分を

信ずることは確かだ。資本主義的民主主義の機構、若くはもつと正確に云へば、その最も重要な弾機の一つを形ちづくるものは、これなのだ。しかしこれはみんな序でに言ふのに過ぎない。この上クラインズを論議しようとは思はない。

コンスタンチノープルへ到着してからすぐ後で、私は、ベルリンの新聞の一つで、ワイマール國民議會の第十回記念日の席上で、國會の議長のやつた演説を讀んだ。それは次の言葉で終つてゐる。

『おそらく我々は、トロツキイ氏に自由な收容所を許與するやうになるであらう。』(大多數の割れるやうな喝采。)

ロエーベの言葉は、私を愕然たらしめた、といふのは、これまであつた凡てのことが、私に、ドイツ政府は私のドイツ入國を許可する事を拒絶するに決したと信ずる理由を與へてゐたからだ。何れにしてもさういふのが、ソヴェット政府の役人の無條件的の聲明だつたのだ。二月十五日に私は、私をコンスタンチノープルへつれて來たゲー・ペー・ウーの代表者を呼んで、云つた。『僕は、僕に與へられたあの報知が嘘であつたと結論せざるを得ない。ロエーベの演説のあつたのは二月六日だ。僕等がトルコへ向けてオデッサを出帆したのは二月十日だ。ロエーベの演説はその時モスコウへ知れてゐた譯だ。僕は勸告する、君は直ちにモスコウへ打電し、ロエーベの演説を盾にとつて、僕に査證を許與するやうに、實際、モスコウからベルリンへ要請せんことを提議し給へ。ドイツへの僕の許與問題をめぐつて、スターリンがこしらへ上げたやうに思はれてゐる隠謀を拭掃する上

に、それは少しも不名譽なことではないだらう。』二日の後、ゲー・ペー・ウーの代表は、次の答へを私のところへ持つて来た。『モスコウへ送つた電報に答へて、次の確答を受取つた、即ちドイツ政府は、二月の始めに査證を出すことを無條件的に拒絶したのであつて、新たに要請しても無用であらう。ロエーベの演説は責任のないものだ。もし貴下がこれを確かめようと希望するなら、自身で査證を要請してもよろしいと。』

この見解は私には信じ難いものに思はれた。私は、ドイツ國會の議長の方がゲー・ペー・ウーの役人よりも、彼の黨と彼の政府の意嚮を知る上に、一層好適の地位にあるものと、考へてみたのだ。同じ日に私はロエーベに打電して、彼の言説に基いて、私はドイツ領事館へ査證の許與方を出願したと述べた。民主々義及び社會民主々義新聞紙は、革命的獨裁の信者が民主々義的の國家に避難所を求めざるを得なくなつたといふ事實から、惡意のある満足を引出した。また或るものは、この教訓によつて一層よく私が民主々義の制度を理解するやうになるだらう、とさへ述べた。私としては、その教訓がどんな工合に實現されるものか、待つて、見てゐるより外に仕方がなかつた。

民主々義的避難權とは、或る政府が自身と同一の見解をもつてゐる人々に厚意を示すことに存するのではないことは、明かだ——そんなことはアブル・ハミッドですらやつた。またそれは、流刑に處した政府の許可だけで、流刑者に民主々義的に入國を許すことに存するでもない。避難權とは、その國の法律に服従するといふ條件で、自己の反對派にすら或る政府が避難所を與へること(文書で)に存するのだ。私はもちろん社會民主々義政府の妥協し難い反對派としてのみ、ドイツに

入國することが出来るのだ。私は、その目的で私を訪ねて来たドイツ社會民主々義新聞のコンスタンチノープル通信員との會見で、必要な説明を與へた。私はそれを會見後すぐ書きとめておいたから、そのままここに引用しよう。

『いま私は、ドイツ——ここでは政府の大多數が社會民主々義者から成つてゐる——へ入國許可を出願してゐるのであるから、社會民主々義にたいする私の態度を明瞭にしたいと切望してゐる。この點では何等變つたところはない。社會民主々義にたいする私の態度は、正にこれまで通りだ。その上、スターリンの中央派的徒黨にたいする私の闘争は、社會民主々義にたいする一般的闘争の反映に過ぎないのだ。君も僕も、何等曖昧やごまかしを必要としない。』

『社會民主々義出版物の或るものは、民主々義の問題にたいする私の立場と、ドイツへの私の入國出願との間に、一箇の矛盾を見ようと努めてゐる。そこには何等矛盾はない。我々は決して、言葉の上で、アナキストが民主々義を「否認」するやうには、民主々義を「否認」しない。ブルヂョア民主々義は、それに先立つ諸××形態に比較すると、優れた諸點をもつてゐる。しかしそれは永久的なものではない。それは社會主義社會に席を譲らなければならぬ。プロレタリアートの獨裁は、社會主義社會への橋梁だ。』

『あらゆる資本主義國家で、コンミニュニストは議會闘争に参加してゐる。避難權の行使と、普通選挙權の行使、言論出版の自由權の行使その他との間に、原則上に何等相違はないのだ。』

私の知つた限りでは、この會見談は遂に公表されなかつた。その間に、私にドイツ入國を許可す

る必要を主張する言説が、社会民主主義新聞中に持ち上つた。社会民主主義辯護士の一人、ローザンフェルド博士は、彼自身の發意で、私のドイツ入國許可を手に入れる目的で、自身で私の爲に執りなしをやつた。しかし手始めに、彼は困難にぶつかつた、といふのは數日後私は彼から電報を受取り、ドイツに滞在する間、どんな拘束ならそれに服従する意嚮であるかと訊ねられたのだ。私は答へた——『私は、ベルリンを離れて、全く孤獨で、どんな事情の下でも、公開の集會で演説せず、ドイツの法律の許す範圍で、もつばら文筆上の勞作に没頭して、暮し度いと思つてゐる。』

そんな譯で、當の問題も早や民主主義的避難權でなく、特別の條件でのドイツにおける居住權であつた。私の反對派が私に與へてゐた民主主義の教訓は、第一歩で制限的解釋を施された。だが、これがお終ひではなかつた。數日後、私は新たに電報で問合せを受けたが、それは醫術上の手當だけの目的で、ドイツへ來ることに同意しないか？ といふのだ。私は電報で返辭した。『尠くとも私の健康のために絶対に必要な手當を受ける間、ドイツにとゞめておいて欲しい。』

かくて、避難權は、この段階になると手當を受ける權利に萎縮した。私は若干の有名なドイツ醫師の名をあげてやつたが、彼等は過去十年間私を取扱つて來たもので、現在はこれまでより以上にその助けを私が必要としてゐたものだつた。

復活祭に向つて、ドイツの新聞紙は新しい意見を掲げ始めた。トロツキイは實際にはドイツの醫師とドイツの療養地を絶対に必要とするほど、それほど病んでゐるのではないといふ意見が、政府サークルに持上つてゐるといふのだ。三月三十一日に、私はローゼンフェルドに打電した。

『新聞紙によると、私の病氣は、私がドイツ入國許可を得るに足るほど、爾く絶望的なものでないとのことだ。お訊ねするが、ローゼンフェルドは、『避難權』か、又は『手當を受ける權利』を私に與へたか？ 私は、どんな醫術當局のどんな検査にも服するつもりである。私は、療養地季節のお終ひになつた時、ドイツを去る考へてゐる。』

こんな工合で、數週間のうちに、民主主義的原則は、三度切斷された。避難權は最初は特別の制限的條件での居住權に、ついでは手當を受ける權利に、最後には埋葬權に縮少された。だがこのことは、私が民主主義の全利益を、一箇の死骸としてのみ理解することが出來たといふことを、意味してゐる。

私の電報には何等返辭がなかつた。數日待つた後で、私は兩びベルリンへ打電した。『返辭をくれないのは、不誠實な形式での拒絶だと認める。』この後始めて、四月十二日に、即ち二箇月経つて後に、ドイツ政府は私の入國許可の出願を拒絶したとの報道を私は受取つた。かうなつては國會議長ローゼンフェルドに打電すること以外、何をして見ようもなかつた。『民主主義的避難權の利益を實際に學ぶ機會の無かつたことを、遺憾に思ふ。』かう云つたのが、ヨーロッパで『民主主義的』査證を見出さうとの私の最初の企ての、簡単な、教訓的な歴史だ。

もちろん、避難權が私に與へられたとしても、そのこと自身が少しも階級××についてのマルクス主義理論の拒絶を意味するものでないのは、分つてゐる。自己獨特の原則から生れたのではなく、支配階級の實際上の要求から生れて來た民主主義の統治は、それ自身の内部論理の力によつて、またそれ自身のうちに避難權を持つてゐる。プロレタリア革命家に避難所を許與することは、決して

て、民主主義のブルジョアの性質と矛盾するものではない。しかしいまはかゝる論議をやる必要は何もない、といふのは、社会民主党に指導されるドイツにおいて、何等の避難権も存在しないといふことが分つたのだから。

十二月十六日に、スターリンはゲー・ペー・ウーを通じて、私に政治的活動を放棄するやうにと提議して来た。新聞紙で避難権の問題が論議されてゐた間、それと同様な条件が、勿論承認されるものとしてドイツ人によつて提出されてゐた。このことは、同じくミュラーとストレーゼマンの政府も、スターリンと彼の配下のテールマン一派の抗争してゐる觀念を、危険で、有害なものと考へてゐるといふことを意味する。スターリンは外交的な手段で、テールマン一派は、煽動的手段で、社会民主党政府が私のドイツ入國許可を拒絶せんことを——おそらくプロレタリア××の利益に名を藉つて——要求した。他の側では、チエンバーレンとウエスタアブ伯及びその同類が、私に査證を與へることを拒絶せよと——資本主義的秩序の名において——要求した。ヘルマン・ミュラーはかくて、右翼の彼の仲間と、左翼の彼の同盟者の雙方を満足させることが出来たのだ。社会民主党政府は××的マルクス主義にたいする國際的共同戦線の連結環となつたのだ。この共同戦線を想ひ浮べるためには、マルクスとエンゲルスの『×××宣言』の最初の數行をひもとくだけで十分だ。『この亡靈（コシミュニズム）にたいする神聖戦争において、ローマ法王とツァー、メツテルニツヒとギゾー、フランス急進派とドイツの警察——との舊ヨーロッパの一切の勢力が手をつないだ。』名前は異つてゐるが、本質は同一だ。今日、ドイツの警察の役目が社会民主党によつて

演ぜられてゐるといふ事實は、事態を微塵も變へるものではない。本質的に云つて、彼等はホーヘンツォーレルンの警察と同一のものを保護してゐるのだ。

民主主義者を導いて査證を拒絶させる理由は、實に種々雑多だ。たとへばノルエー政府は、専ら私の身の安全を考慮してそれをやる。私は、オスローの高官の間に、そんなに澤山の親切な友達を持つてゐるとは、決して思つてゐなかつた。ノルエー政府は、もちろん、ドイツ、フランス、イギリスその他の凡ての政府と同じに、心から避難権に賛成してゐる。避難権は、誰でも知つてゐるやうに、神聖な、侵すべからざる原則だ。だが、流刑者は第一に、何によつても殺害される懼れはないといふことを保證した證明書を、オスローに提出しなければならぬ。さうすれば彼等は彼に厚意を示すであらう——もちろん他の障害が何等起らぬといふ條件附で。

私の査證についてのノルエー國^{ノルウェー}會での二つの討議は、無類の政治文獻をつくり上げてゐる。それを讀んで私は、ノルエーの私の友達が私のためにそれを手に入れようと努力してゐた査證が、拒絶されたことにたいして、尠くとも部分的の代償を與へられた。第一に、ノルエー首相は、もちろん私の査證に關して秘密警察の首腦者と協議した——その首腦者の民主主義的の原則における職務は、私は取急いで云つておくが、明々白々たるものだ。モイウインケル氏によると、秘密警察のその首腦者は、この際なすべき最も賢明なことは、トロツキイの敵をして彼をノルエーの國土から追ひ出させてしまふことだとの意見を提出した。それはそんなにハッキリとは表明されなかつたが、意味したものはそれであつた。司法大臣は、彼として、ノルエー國會で説明して、トロツキイを保

護する費用はノルエーの豫算にとつて餘りに過大であらうと述べた。國家經濟の原理——また争ふ可からざる民主々義的原理の一つ——は、この度は、避難權に絶対に反對するものであることを自證した。これを要するに避難所を最も必要としてゐる人間が、それを得る機會が最も渺いといふのが、結論であつた。

これに比べると、フランス政府は遙かに惻巧であつた。マルヴィによつて發せられた私のフランスからの退去命令は、その後決して廢棄されてゐないといふ事實をあつさり指摘したゞけだつた。それが民主々義の途に立ちふさがる到底越ゆべからざる障碍なのだ！ 私はこの書の初めの方で、その放逐の後、そしてマルヴィの命令が廢棄されないにも拘らず、いかにフランス政府がその官吏を私の手配の下におかうとしてゐたか、いかに私がフランスの代議士、大使、及び閣僚の一人の訪問を受けたかを述べておいた。しかしこれらの現象は、明かに、遂に相會することなき二つの別箇の平面から生れて來たのであつた。而して現在、その建前はかうだ、もしフランス警察の文書綴りのなかに、ツアーの外交家の要求によつて發せられた私のフランス退去命令が綴り込まれてなかつたならば、疑もなくフランスにおける避難所が私に許與されたであらうと。そも／＼警察の命令なるものが北極星に似たものであるのは周知のことで、それは除去することが出来ないやうに、また無効にすることも出来ないのだ。

何れにしても避難權は同じくフランスからも消滅した。それなら、この權利がその——避難所を見出した國は、何處か？ おそらくイギリスか？

一九二九年六月五日、ラムゼー・マクドナルドがその一黨員たる獨立労働黨は、自身の發意で、公式の招聘狀を私に送り、イギリスへ來て、同黨の學校で講義をやつてくれるやうにと申込んだ。同黨の書記長の署名のあるその招聘狀には、かう書いてある。「當地には労働政府が形成されてゐるのであるから、我々は、貴下がこの目的でイギリスを訪問されることに關して、何かの困難が起らうとは信ずることが出来ない。』それにも拘らず、困難が起つたのだ。私は、マクドナルドの支持者のまへで講義をすることも許されなければ、イギリスの醫師の援助を求めすることも許されなかつたのだ。私の査證の出願は、きつぱりと拒絶された。労働大臣クラインズは下院において、この拒絶を辯護した。彼は、チャーレス二世の如何なる大臣の名譽もこれを高めたであらうほどの明瞭さで、民主々義の哲學的意味を説明した。クラインズによると、避難權とは、およそ流刑者が避難所を要求する權利ではなくて、國家がそれを拒絶する權利である。クラインズの定義は、一點で即ち一撃の下に謂ゆる民主々義の基礎そのものを破壊したといふ點で、目ざましいものだ。避難權は、クラインズの様式からすると、常にツアーのロシアに存在してゐた。ペルシャの王が一切の革命家を絞殺することに失敗して、彼の愛する國土を去らざるを得なかつた時、ニコラス二世は彼に避難權を許與したばかりでなく、彼に十分な物資を與へてオデッサで生活させた。しかし、その憲法がクラインズによつて開陳された一つの原因、即ち市民は×××××が彼等に與へ又は彼等から奪ふものに常に満足しなければならぬといふ原則からしか成立つてゐなかつたツアーのロシアにおいて、かつてアイルランド革命家の何人も、避難所を求めざるやうなことは起らなかつたのだ。ムツソ

リニは、正にこの原則に基いて、アフガニスタンの王に避難所を提供した。

信心深いクラインズ氏は次のことを知つてゐたに相違ない。即ち、民主主義は、ある意味において、キリスト教會から避難権を繼承したもので、キリスト教會はまた、他の多くのものと一緒、それを異教徒から繼承したものであること、これだ。追ひ立てられてゐる罪人にとつては、その迫害からのがれるためには、寺院に入つたゞけ、時としてはその扉の環に手を觸れたゞけで十分であつた。かく教會は、避難権をもつて、被迫害者の避難所に入る權利だと理解したのであつて、異教徒又はキリスト教僧侶の側の意志の強制執行とは理解してゐなかつたのだ。今日まで、私は、敬虔な労働黨員等は社會主義のことにかけては通曉するところ尠いが、教會の傳統にはたしかに通曉してゐるものと、考へてゐた。いま私は、彼等がそれにすら通曉してゐないことを見出すのだ。

しかし何故クラインズは、彼の國法理論の最初の數行で立ち止るのか？ 氣の毒千萬だ。避難権は民主主義の體系の一構成部分に過ぎない。その歴史的本源においても、その法的性質においても、それは言論、集會の自由權等々と、異つたものではない。クラインズ氏は、必ずや、間もなく次の結論に、即ち言論自由の權利は、市民が彼等の思想——それが何であらうと——を表白する權利として在るのではなくて、、、、を禁ずる權利として在るのだといふ結論に、到着するであらう。×××に關しては、結論はすでにイギリスの法律によつて與へられて來てゐる。

クラインズの不幸は、議會には労働黨分派の議員がゐて、彼に向つて、尊重すべきものではある

が勝手の悪い質問を放つが故に、彼の行動を聲高々と説明しなければならなかつたといふことだ。ノルエーの首相も、これと同じ不快な立場におかれてある彼自身を見出した。ドイツの内閣はこの不愉快をまぬがれた、といふのは、國會全體のうちに、避難権問題に何等かの興味をもつ議員はただの一人もゐなかつたからだ。曩に國會の議長が、私がそれを求めずらなかつた時に、私に避難権を許與すると約束して、議員の大多數の喝采を博したことを想起すると、右の事實は特別の意味をもつて來るのだ。

十月革命は、民主主義の抽象的の原則を宣布しもしなかつたし、また、避難権のそれを宣布しもしなかつた。ソヴェエツト國家は公然と、革命的獨裁の權利の上に打ち樹てられた。だが、このことはヴァンダーヴェルド又は他の社會民主主義者が、ソヴェエツト共和國に來ることを妨げなかつたし、十月革命の指導者の生命をねらつて、テロリスト的の企てをするの罪を犯した人々の公然の辯護人として、モスコウに現れることすら、これを妨げなかつた。

現在のイギリス諸大臣も、我々の訪問者のうちに在つた。私は、我々のところへやつて來た人々の凡てを想ひ出すことは出來ない——私はいま手元に必要な材料がない——が、そのうちにスノーデン夫妻のあつたことを記憶してゐる。これは遙か遠い一九二〇年のことだつたに相違ない。彼等は單に旅行客としてではなく、賓客として接待された。グラント・オペラの一ボックスが彼等に提供された。私はちよつとした挿話と結びつけてこれを記憶してゐるので、こゝでその挿話を述べておく値打があらう。私は戦線からモスコウに到着した、そして私の考へにはイギリスの賓客などはま

るでなかつた、事實、私は、他の事柄に没頭してゐたので、ほとんど新聞紙を讀んでをらず、その賓客が誰であるかさへ知らなかつたのだ。スノーデン、スノーデン夫人、及びもし私に誤りがなければ、バートランド・ラッセルとウイリアムス、ならびに他の人々の接待に當つてゐた委員會は、ロゾウスキイを委員長としてゐたが、彼は私に電話をもつて、イギリス賓客のゐる劇場へ私の來ることを委員會が要求すると告げた。私は辭退しようと思つたが、ロゾウスキイは、彼の委員會はポルトビュローから全權を附與されてゐる、他の人々に規律の實例を示すのは私の義務だ、と言ひ張つた。私は濫々行つた。ボックスには約一ダースほどのイギリス賓客がゐた。劇場には觀客が詰め込まれてあふれるやうであつた。我々は戦線で勝利を博してゐたので、劇場は猛烈にその勝利を喝采した。イギリス賓客も亦、私を取巻いて、喝采した。彼等の一人はスノーデンであつた。今日もちろん彼はこの冒険をいさゝか恥ぢてゐる。しかしそれを抹殺することは不可能だ。而して私も亦、それが抹殺さればうれしい、といふのは労働黨員と私との『親和』は過失であつたばかりでなく、同時に政治的誤謬であつたのだ。私は賓客から離れることが出來るとすぐ、レーニンに會ひに行つた。彼は非常に當惑してゐた。『君があの人々(レーニンはいつも『人々』といふ無關心な言葉をつかつた。)と一緒にボックスに現れたといふが、本當か?』私は辯解して、ロゾウスキイのこと、中央委員會の接待委員會のこと、規律のこと、及び特に私が賓客はいつたい誰であるのかさつぱり知らなかつたといふ事實に言及した。レーニンはロゾウスキイ及び一般に全委員會に激怒してゐた。そして私も亦、長い間、私の不謹慎について、私自身を赦すことが出來なかつた。

現在のイギリス大臣の一人は、たび／＼モスコウを訪問した、と私は信ずる。とにかく彼はソヴイェット・ロシアで休息し、コーカサスに滞在し、私を訪問した。それはランズベリーであつた。私が最後に彼と會つたのは、キスロヴオドスクであつた。私は、ほんの二十五分間であつたが、『安息の家』へ立ち寄るやうにとすゝめられた。そこには我々の黨の若干黨員と、若干の外國觀光客とが滞在してゐた。かなり大勢の人々が大きな食卓をかこんで坐つてゐた。それはつゞまじやかな晩餐會の性質を帯びてゐた。名譽の座席には賓客のランズベリーが着いてゐた。私が到着すると、彼は乾杯して、『彼は陽氣な、いゝ奴だから。』(“For he's a jolly good fellow”)を歌つた。これが、コーカサスで私に示したランズベリーの感情であつた。今日、彼も亦おそらく、それを忘れたと思つてゐるだらう。

私は査證を出願した時、スノーデンとランズベリーに特別に電報を打つて、曩にソヴイェットによつて、一部分は私によつて彼等に與へられた優待を、想ひ起させた。私の電報は何等の結果ももたらさなかつた。政治においては、回想は、民主主義原理と同様に、何等の重力も持つてゐないのだ。

ンドニー・ウエツプ夫妻は、極めて最近、即ち一九二九年三月の初旬、私がすでにプリンキポに來た時に、非常に懇ろに私を訪問した。我々は、労働黨が政權をにぎる可能性があることについて語り合つた。私は話のついでに、マクドナルド政府が出來れば、その直後に私は査證を要求するつもりだと述べた。ウエツプは、その政府は自己が十分に強くないことを見出すだらう、且つその政

府は自由黨に依りかゝつてゐるのであるから、いづれにしても自己が十分に自由でないことを見出すだらう、との意見を表白した。私はそれに對して、自己の行動に責任を持ち得るほど、爾く強力でない黨派は、權力を握る資格はない、と答へた。我々の間の解け難き相違は、何等新たな試験を必要としなかつた。ウェツプは權力の地位に上つた。私は査證を要求した。マクドナルド政府は私の出願を拒絶した、がその理由は、同政府が民主主義的確信を遂行することを自由黨が妨げてゐるからといふのではなかつた。全くその反對だつた。労働黨政府は、自由黨からの反對があつたに拘らず、査證を拒絶した。これはウェツプが見透さなかつた變態であつた。だが、こゝに、その時彼はロード・パスフキールドではなかつたといふことを指摘しておかなければならない。

それらの人々の或る者達を私は個人的に知つてゐる。他の者達を私は單に類推によつて裁斷することが出来る。私は、彼等を正確に測定してゐると思ふ。彼等は、特に戦争以來、労働團體の自動的發展と、自由主義の單なる政治的枯渴によつて、引上げられたのだ。彼等は、二十五年乃至三十年以前に彼等の或る者達が持つてゐた素朴な理想主義を完全に流し出してしまつた。その代りに彼等は政治的の慣習と、手段の選擇における不謹慎とを獲得した。だが、彼等の一般の見解では、彼等は依然として以前の通り——臆病な、小ブルジョアジで、その思考の方法は、イギリス石炭工業の採炭方法よりも遙かに遅れてゐる。今日、彼等の主要な關心事は、宮廷貴族及び大資本家が彼等を眞面目にとることを拒絶しやしないだらうか、といふことだ。そしてそれは何も不思議ではない。彼等は、政權を握つてゐる今日、たゞあまりにも鋭敏に、彼等の弱さを自覺してゐるに過ぎない。

い。彼等は、舊支配階級——そこでは支配の傳統と慣習とが、世代から世代へと引繼がれ、屢々才能と知力の代りをつとめてゐる——の持つてゐた諸性質を持つてもゐないし、持つことも出来なかつた。だがまた彼等は、彼等の眞の勢力を形成すべきもの——大衆にたいする信頼と、自己の脚で立つ能力——も持つてゐないのだ。彼等は、その堂々たる威風が彼等の弱小な想像力をたじろがさせてゐる保守俱樂部を懼れると同様に、彼等をその地位においた大衆を懼れてゐる。彼等の政權を握つてゐることを正當化せんがために、彼等は、自分達が單なる革命的成上者でないといふことを、舊支配階級に示す必要があるのだ。そんなことがあつて堪るものか！ 否、彼等は實際、あらゆる信任を博する資格があるのだ、といふのは、彼等は教會に、國王に、上院に、稱號制度に、忠實に歸依してゐるからだ。即ち私有財産の神聖不可侵の原則ばかりでなく、中世期の一切のからくたに忠實に歸依してゐるからだ。彼等にとつては、革命家への査證の許與を拒絶することは、實際上、彼等の尊嚴を再び新たに示威すべき幸福な機會なのだ。私は彼等にさういふ機會を與へたことを非常に悦んでゐる。政治においては、自然におけると同様に何等浪費といふものはないのであるから、時が來れば、これも決算に加へられるであらう。

クラインズ氏と、彼の下僚の政治警察の主腦者との會見の光景を心に描くには、大した想像力はいらぬ。その會見の間、クラインズは、恰も試験を受けてゐるかのやうに感じ、自分が試験官の眼に十分にしつかりした者に、または政治家的に、或はまた十分に保守的に映じないだらう、とそれを心配してゐる。こんな譯で、政治警察の主腦者の側では、クラインズ氏をうながして、翌

日の保守派新聞紙で満幅の賛意をもつて迎へられる決定をなさしめるのに、ほとんど工夫は必要でない。だが保守派新聞紙はたゞ賞讃はしない——それは賞讃でもつて、相手を殺すのだ。嘲弄するのだ。それは爾く謙遜にその賞讃を求める人々にたいして、自己の抱く輕蔑を隠散するやうな面倒はやらない。例へば、『デーリー・エックスプレス』紙が世界で最も聰明な新聞の一つに屬するものとは、何人も言はないであらう。しかもなほこの新聞紙は、その背後の革命的觀察者の壓力から『神經質なマクドナルド』を注意深く擁護してゐることにたいして、労働黨政府に賞讃の意を表するに當つて、極めて辛辣な言葉を見出してゐるのだ。

ところで、新しい人間社會の基礎をよこたへるために呼び出されてゐるものは、この人々であらうか？ 否、彼等は舊社會の最後から二番目の手段に過ぎないのだ。私は『最後から二番目』といふ、その理由はその最後の手段は物理的抑壓だからだ。避難權問題についての西ヨーロッパ民主主義の點呼は、他のことはこれをおいて、私に妙からぬ愉快な調書を與へたことを承認しなければならぬ。時々私には、民主主義の原理をテーマとした一幕物の喜劇の『汎ヨーロッパ』演出を見物してゐるかのやうに思はれた。その臺本は、もし彼の血管を走るフェービヤンの液體にジョナサン・スキフトの血が五パーセントばかり加へられて、それで強められれば、バーナード・ショーによつて書かれ得よう。だが、誰がその臺本を書いたにしても、戯曲『査證のないヨーロッパ』は、依然として非常に教訓的だ。アメリカについては何等述べる必要はない。アメリカ合衆國は、最も強い國であるばかりでなく、最も他から恐怖されてゐる國だ。最近フーパーは、彼の魚釣りの熱望

を説明して、この娛樂の民主主義的な性質を指摘した。もしさうなら——私はそれを疑ふが——要するにそれがアメリカ合衆國になほ存在してゐる民主主義の若干の殘存物の一つだ。そこでは避難權は久しい以前から無くなつてゐるのだ。査證のないヨーロッパとアメリカ。だがこの二つの大陸は他の三つの大陸を所有してゐる。これは——査證のない地球を意味するのだ。

民主主義にたいする私の不信は私の最大の罪惡だと、これまで多くの方面から私に説明されて來た。何と多くの論文、書物すらがこれについて書かれて來たか！ だが、一度私が民主主義の一寸した實物教授を與へて欲しいと求めると、それを志願する者はたゞの一人もない。地球は査證のないものであることを自證した。それより遙かに重要な問題——貧富の裁判——が、民主主義の形式と儀式を嚴密に守ることによつて決定されるだらうと、何故私は信じなければならぬのか？

然らば革命的獨裁はその豫期された結果を産出したか？——私はこの質問を聞く。それは、十月革命の經驗を算定し、その未來の展望を指示することによつて、始めて答へられるであらう。自叙傳はこれをする場所ではない。私は、特別の一書——私は中央アジアに滞在してゐた間に既にその著述に着手し始めた——において、この問題に答へることに努めるであらう。だが、私は、何故かくも徹頭徹尾、私の舊來の道を固執するのか、たとひ數行にしる、それを説明しないでは、この私の生活の物語を終ることは出來ない。

すでに成熟し、若くは老齡に近づいてゐる私の世代の思ひ出での中に起つた事は、略圖的に次の

やうにそれを描くことが出来る。數十年の間——前世紀の終末と今世紀の初頭——に、ヨーロッパの住民は、工業によつて嚴格に訓練されて來た。これは巨大な結果を生み出し、人々にたいして新しい可能を打開するものゝやうに思はれた。だが實際には、それは××を導き來つたに過ぎないのだ。××を通じて、人類が、貧血症的哲學の歡聲を前にして、次のことを自信し得たのは、眞實だ。人類は要するに荒廢化しつゝあるものではなく、反對に、生命と、力と、勇敢と、企圖に満ちたものであること、是れだ。同じ××を通じて、人類は、空前の力をもつてその技術力を實現した。それは恰も一人の人間が、彼の呼吸管に故障のないことを證明するために、鏡の前で剃刀をもつて自分の咽喉を切斷し始めたかのやうであつた。

一九一四——一八年の手術が終つて後、いまから以後は、その瘡傷——その前四箇年の間はこれを與へることが最高の道德的義務であつたのだ——を醫することが最高の道德的義務でなければならぬと宣言された。工業と繁榮とはその地位に回復されたばかりでなく、合理化の鋼鐵のコルセツトのなかへ押込まれた。謂ゆる『再建』は、かの破壊を導いたと同じ諸階級、同じ諸黨派、及び同じ個人すらによつて、指導されてゐる。ドイツに見るやうに、政治的統治の變化の起つた處では、再建の方向において指導的役割を演じてゐる人々は、破壊の誘導に第二位及び第三位の役割を演じた人々だ。嚴密に云ふと、變化したものはこれだけだ。

戦争は全一世代者を一掃してしまひ、恰も人々の記憶のうちを割目を創つて、新しい世代者が、彼等の實際に従事してゐることは以前に爲されて來たものを單に一層高い歴史的階梯で繰返してゐるに過ぎず、そこには一層恐る可き結果が含まれてゐるといふことを、餘りにも親しく注意するのを妨げでもするかのやうだ。

ロシアの勞働階級は、ポリシエヴィキの指導の下で、生活——人類が單なる發狂の週期的發作に赴く可能性を排してしまつて、一層高い文化の基礎を横たふ可き——の再建を達成しようとして企てた。それが十月革命の意義であつた。確かに十月革命が自らに課した問題は、まだ解決されて來てゐない。だがその眞の本質において、この問題の解決は、數十年を必要とするのだ。さらに十月革命は、全體としての人類の最も新しい歴史の出發點として考へらる可きものだ。

三十年戦争の終りに當つて、ドイツの宗教改革は、癡狂院から生れた人間の仕事のやうに見えたに相違ない。或る點まで、實際さうだつたので、ヨーロッパの人類は、中世の僧院から生れ出たのだ。近代のドイツ、イギリス、アメリカ、及び一般に近代世界は、無数の犠牲をもつた宗教改革なしには、決して在り得なかつたであらう。もし犠牲が一般に許さる可きものであるならば——だが、いつたい誰の許しを求めることが出来るか？——それは確かに、人類を前進させる犠牲だ。

フランス革命についても同じことを言ふことが出来る。かの心の狭い、反動的に術學的なテューは、ルイ十六世の處刑後數年間、フランスの人民は舊政治の下におけるよりも貧しく、不幸であつたといふ事實を確證した時、極めて深い發見をしたものゝやうに想像した。だが、事態の全問題は、フランス大革命のやうな出來事が『數年間』の尺度に立つて、批判し得られるものでないといふことだ。その大革命がなかつたならば、新しい全フランスは決して在り得なかつたであらうし、

ティヌ自身、彼にたいして新生活を開いた革命を抹殺し得るものとはならないで、まだ舊政治の下で誰か請負師に雇はれてゐる一書記だつたであらう。

十月革命を批判するには、更に一層大きな歴史的展望が必要だ。手のつけられない阿呆だけが、十二箇年間にそれが一般的平和と繁榮を造り出さなかつたといふ事實を、十月革命に反對する證據として引用し得るのだ。ブルジョア社會の進化の二つの異つた段階を代表し、相互に約三世紀によつて隔てられてゐるドイツの宗教改革とフランス革命の尺度を採用するならば、後進、孤立のロシアが、革命後十二箇年にして、戰爭の前夜に見たよりも低からぬ水準の生活を人々の大衆に保證することが出来たといふ事實にたいして、感歎しなければならぬのだ。それだけがこの種の奇蹟だ。だがもちろん十月革命の意義はそこに在るのではない。革命は一つの新しい××××の實驗であつて、その實驗は、多くの變化を経るであらうし、おそらくはその當の基礎から新たに遣り直されもするであらう。それは、最新の技術的達成の基礎に立つて、全く異つた性質を帯びるであらう。しかし乍ら數十年及び數世紀の後には、今日××××××××××がドイツの宗教改革又はフランス革命を顧望するやうに、新しい××××××××は十月革命を顧望するであらう。これは實に明白な、争ひを容れないほど明白なことであるから、歴史の教授達ですら、やつと數年経つて後のことにせよ、それを理解するであらう。

そこで君の個人的運命はどうなるか？——私は、好奇心と皮肉のまじつたこの質問を聞く。こゝで私は、この書にこれまで述べたことに、何等付け加へることは出来ない。私は、一人の人間の個

人的運命の碼尺でもつて、歴史的過程を測ることをしない。私は、私の運命を客觀的に評價し、主觀的にそれに生きる、それは社會的發展の行程と解け難く結ばれてゐるものに過ぎないからだ。

流刑以來、私は、諸新聞紙のうちに、私に落ちかゝつた『悲劇』を主題とした美文を一度ならず讀んだ。私は何等の個人的悲劇も知らない。私は革命の二つの章の變移を知つてゐる。私の論文を掲載した一アメリカ新聞紙は、それに深刻なノートを附して、この論文の筆者は打撃を蒙つたに拘らず、彼の論文が實證するやうに、理性の明瞭性を保存してゐると述べた。推理の力と政府の地位との間に、心的均衡と現在の立場との間に、一箇の結合關係を打ち樹てようとする俗流的企てにたいして、私はたゞく驚愕を表し得るに過ぎない。私は、そんな結合關係を一切知らないし、かつてそれを知つたことがない。牢獄で、書物を前にし、又は手にペンを執り乍らも、私は、革命の大衆的集合の前にあると同様な、深い満足の間を經驗した。私は權力の機構をもつて、精神的満足であるよりも寧ろ避く可からざる負擔と感じた。だが、誰か他の人の立派な言葉を引用した方が、おそらく手つ取り早いであらう。

一九一七年一月二十六日、ローザルクセンブルグは獄中から或る女の友達に書き送つた。『かく日常生活の凡庸事のうちに、完全に自己を失つてしまふことは、私の概して理解することも、又は堪へることも出来ないことです。たとへば、何とゲーテが静かな優越心をもつて物質的な事物の上に立つてゐたかを御覽なさい。彼がどういふ事象を通つて生活しなければならなかつたか、それだけ考へて見て下さい——それは近い距離において一片の流血的な全然無目的な笑劇と思はれたに

相違ないフランス大革命と、それから一七九三年から一八一五年に互る絶えざる戦争です。私は貴女に、ゲーテのやうに詩を書けとはすゝめません。が、生活にたいする彼の見解、彼の興味の普遍性、その人間の内部的調和は、何人も自身のために創り出すことが出来るものであり、尠くともそのために努力することが出来るのもです。もし貴女が、ゲーテは政治的闘士でなかつたと言はれるやうなことがあれば、私は主張します、正に闘士こそ、事物の上に立つやうに努力しなければならぬのです、それでなかつたならば、彼はあらゆる種類のがらくたに鼻を突込むことになるでせう——もちろん、この場合、私は巨きなスタイルの闘士のことを考へてゐるのです。……』

凜たる言葉だ。私は過日始めてそれを讀んだ。この言葉は、直ちにローザルクセンブルクの様姿を私の心に、これまでよりももつとはつきりしたものの、もつと親しいものとした。

ブルードン、かの社會主義のロビンソン・クルソーは、彼の見解において、彼の性格において、彼の世界観において、私には他人だ。だが、ブルードンは、闘士の性質と、精神的無私と、公の輿論を輕蔑する能力と、最後に、斷じて消えざる多面的の好奇心の炎とを持つてゐた。これが彼をして、一切の同時代の現實の上に立つてゐたと同じやうに、彼自身の生活の一高一低の上に立つて得せしめたのだ。

一八五二年四月二十六日、ブルードンは獄中から友達に書き送つた。『運動は疑ひもなく不規則であり、曲りくねつてゐるが、傾向は不變である。××の利益のために各政府が代る代る行ふことは、不可侵なものとなる。それに反對して企てられるものは雲の如く過ぎ去つてしまふ。私はこの光景を楽しんで見守り、そこに在るあらゆる單純な繪畫を理解する。私は、恰も天上から彼等の説明を受取つたかのやうに、世界の生活におけるそれらの變化を觀察する。他の人々を抑へつけるものは、ます／＼私を高め、私を鼓舞し、防衛する。かゝる場合どうして私に、運命を叱責し、人々について憤懣し、彼等を呪咀せよと求めることが出来るか？ 運命——私はそれを嘲笑する。而して人間に關しては、私が彼等について惱みを感じずるにしては、彼等は餘りに無智で、餘りに奴隸化されてゐる。』

この言葉は、いさゝか宗教的雄辯の臭味はあるけれども、立派な言葉だ。私はこの言葉に賛成する。

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百歳の書に亘り、校訂、註譯、翻譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	10	10	10	20	20	20	30	30
送料(錢)	三	六	六	六	九	九	九	九

昭和十二年十月十六日印刷
昭和十二年十月二十日發行

改造文庫 第一部 第五百十一篇

わが生涯(下)

定價五十錢

譯者 青野季吉

發行者 山本三生

印刷者 植田庄助

東京市芝區新橋七丁目十二番地
東京市芝區濱松町一ノ十三番地

發兌

東京市芝區新橋七丁目十二番地

改

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 四三二番

社

(刷印堂文成)

(長谷部製本)

改造文庫第一部目録

Table listing various books in the '改造文庫' series, including titles like '現代哲學思潮', '宗教の起源', 'カントの平和論', and '古代社會(上巻)'. Each entry includes the author's name and the page number.

Table listing various books in the '改造文庫' series, including titles like '現代哲學思潮', '宗教の起源', 'カントの平和論', and '古代社會(下巻)'. Each entry includes the author's name and the page number.

川のほとり	古泉千穂著	2	信網歌集	佐々木信綱著	刊近	サニ	武林無想庵	6
松の芽	中村定吉著	2	信網歌話	佐々木信綱著	刊近	一青年の告白	武林無想庵	3
海やまのあひ	羅道空著	4	芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	刊近	一週	池谷信三郎著	2
立	春木下利玄著	2	芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	3	室生犀星詩集	室生犀星著	5
花	榎北原白秋著	3	茶七番日記(上巻)	萩原井泉水校訂	4	千家元磨詩集	千家元磨著	3
人間往来	與謝野晶子著	2	茶七番日記(下巻)	萩原井泉水校訂	4	横瀬夜雨詩集	横瀬夜雨著	5
槻の木	窪田空穂著	2	おらが春	萩原井泉水校訂	刊近	修禪寺物語	岡本綺堂著	3
野原の郭公	若山牧水著	2	蟻の生活	梅田信一郎著	3	少年の悲哀	岡本綺堂著	2
原生林	前田夕暮著	3	新花摘	萩原井泉水校訂	2	運命論者	岡本綺堂著	2
空を仰ぐ	土岐善麿著	2	愛すればこそ	谷崎潤一郎著	3	愛	武者小路實篤著	2
童謡集	北原白秋著	2	愛なき人々	谷崎潤一郎著	3	作者別萬葉全集	土岐善麿編著	6
國民歌謡集	北原白秋著	2	痴人の愛	谷崎潤一郎著	4	作者別萬葉以後	土岐善麿編著	6
舞踊詞集	北原白秋著	2	海上	へ島崎藤村著	5	自	橋片山著	3
背徳者	石川淳子著	2	屋上の土	古泉千穂著	5	日本橋	橋片山著	5
チエホフ書簡集	内山賢次著	5	寡婦マルタ	清見隆郎著	3	佛蘭西童話集(第一)	長松英一著	3
鴛鴦の卵	土岐善麿著	3	句集	高沼虚子著	6	佛蘭西童話集(第二)	長松英一著	5
信網文集	佐々木信綱著	2	井泉水句集	萩原井泉水著	5	佛蘭西童話集(第三)	長松英一著	3

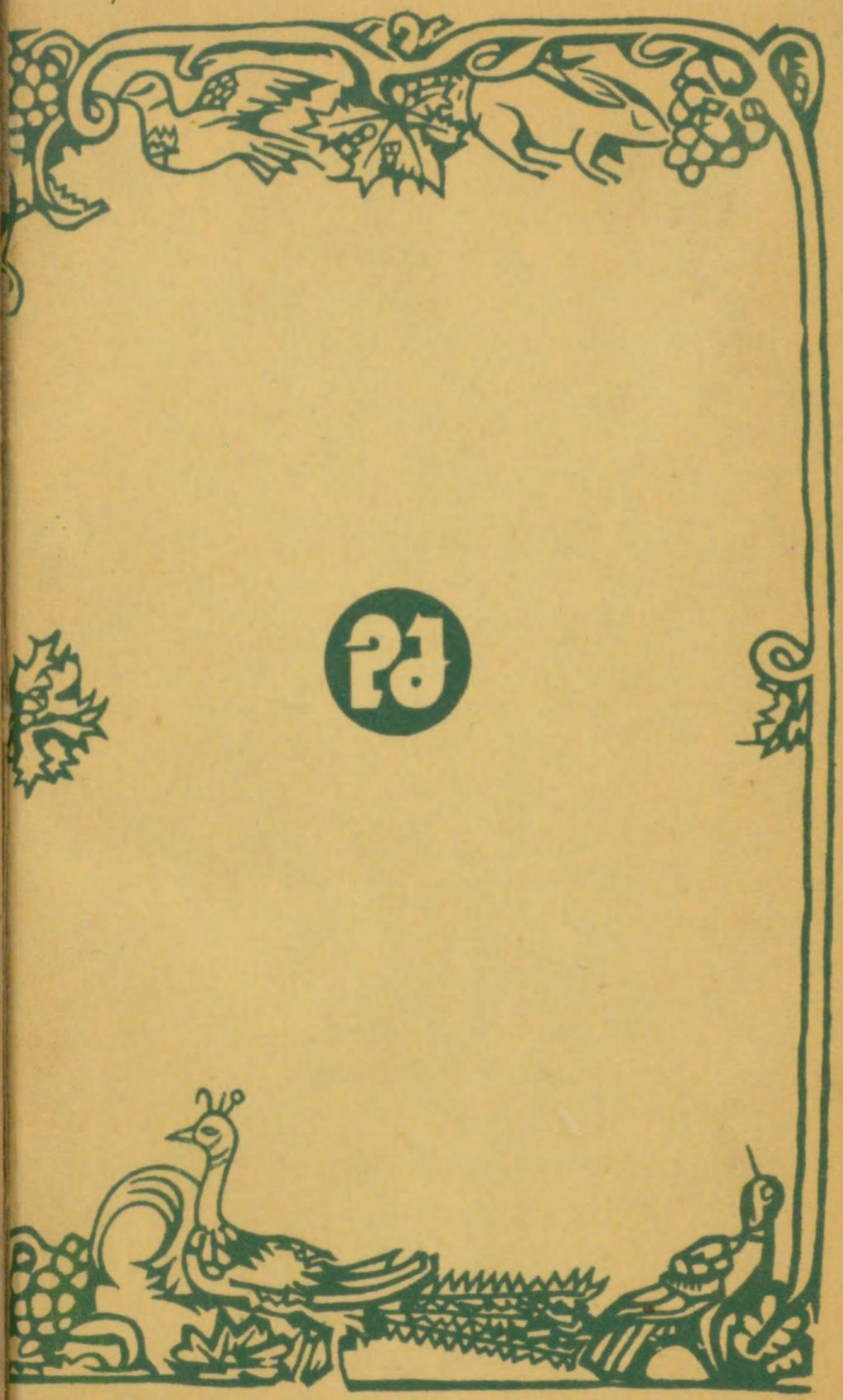
佛蘭西童話集(第四)	長松英一著	刊近	受難	華菊池	寛著	5	イブセン全集二	大山長谷部	5
新死の如く強し	中村星湖著	5	赤い白鳥	華菊池	寛著	3	イブセン全集三	中村仲木	5
巴里の憂鬱	ボオドレエル著	2	明眸	華菊池	寛著	5	イブセン全集四	中村仲木	5
死の舞踏	山本有三著	2	新女性	華菊池	寛著	3	イブセン全集五	大山大関中村	5
野性の呼聲	花園龍定著	3	陸の人魚	華菊池	寛著	4	イブセン全集六	七、八、九、十	刊近
奈落の人々	和氣律次郎著	3	第二の接吻	華菊池	寛著	3	イブセン全集七	八、九、十	刊近
争	和氣律次郎著	2	東京行進曲	華菊池	寛著	3	イブセン全集八	七、八、九、十	刊近
無名作家他(短篇小説)	和氣律次郎著	5	結婚二重奏	華菊池	寛著	3	イブセン全集九	七、八、九、十	刊近
出世	七篇(短篇小説)	4	不壊の白珠	華菊池	寛著	3	イブセン全集十	七、八、九、十	刊近
恩讐の他(短篇小説)	華菊池	5	二つの魂・餘計者	平井ボイ著	2	イブセン全集十一	七、八、九、十	刊近	
彼方に七篇(短篇小説)	華菊池	5	勝利と敗北	中山省三郎著	3	イブセン全集十二	七、八、九、十	刊近	
噂の發生	六篇(短篇小説)	4	肉體の悪魔	土井小牧著	3	イブセン全集十三	七、八、九、十	刊近	
父歸る	六篇(現代物)	5	この人を見よ	小島孝則著	4	イブセン全集十四	七、八、九、十	刊近	
藤十郎	三篇(時代物)	5	父と娘	武者小路實篤著	4	イブセン全集十五	七、八、九、十	刊近	
眞珠夫人	華菊池	6	わしぞ知	武者小路實篤著	4	イブセン全集十六	七、八、九、十	刊近	
慈悲心	華菊池	4	人生雑感	武者小路實篤著	4	イブセン全集十七	七、八、九、十	刊近	
新	華菊池	5	人生雑感(感想集)	武者小路實篤著	4	イブセン全集十八	七、八、九、十	刊近	
火	華菊池	4	イブセン全集一	河野水田小寺	3	イブセン全集十九	七、八、九、十	刊近	
			獄窓	和田久太郎著	5	イブセン全集二十	七、八、九、十	刊近	

1

青 年 (下卷) 林 房 雄著 4	樋口一葉選集(三) 樋口一葉著 5	シユロツフエン 濱野 修著 6	シユタイン家の人々 濱野 修著 6	ヘルマン戦争 濱野 修著 5	野蠻人達・敵・子供達 八住利雄著 6	どん底(他一篇) 昇 暁著 4	私の大鼻・番人・初恋 磯原惟人著 6	回 想 外村史郎著 5	隨 筆 集 上 堀 謙一著 4	折たく柴の記 新井白石著 6	伊豆公夫註 伊豆公夫註 6	ホムブルクの公子 濱野 修著 4	ドイツ・冬物語 小堀 其 二著 4	チエルカツシユ(他七篇) 中村 白葉著 6	潜水艇乗組員 中垣 虎克郎著 3	妾の半生涯 田 英子著 4																																																																																									
父 と 子 昇 ヲルグーネフ著 6	色ざんげ(他十篇) モウバツサン著 3	初 雪(他九篇) 秋田 滋著 3	死せる魂(上) 下 永 融著 3	死せる魂(下) 下 永 融著 3	日記の中から 湯浅芳子著 4	蕩児歸る(他二篇) 巖山 修三著 2	戀をしてみて(他二篇) 巖山 修三著 2	ブツデンの人々(一) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(二) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(三) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(四) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(五) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(六) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(七) トオマス・マン著 4	ブツデンの人々(八) トオマス・マン著 4	小島を友として 木村 毅著 5	静かなドン(二ノ二) 上田 進著 4																																																																																								
静かなドン(二ノ三) 上田 進著 4	静かなドン(二ノ三) 上田 進著 4	征 服 者 小 松 清著 4	新編シラー詩抄 小 栗 孝則著 8	私は 愛 す アウデエンコ著 2	瀧 口 入 道 高山 樗牛著 2	萬葉集略解(一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(二十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(三十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(四十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(五十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(六十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(七十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(八十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十一) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十二) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十三) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十四) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十五) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十六) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十七) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十八) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(九十九) 加藤 千 隆著 2	萬葉集略解(一百) 加藤 千 隆著 2

(以下續刊)

5
1



569
142

